
テイルズオブエクシリア little angel

風音 ツバキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テイルズオブエクシリア l i t t l e a n g e l

【Nコード】

N 3 6 5 8 X

【作者名】

風音 ツバキ

【あらすじ】

犯罪神マジエコンヌからゲームギョウ界の危機を救った女神、フウ。

そんな彼女は、いつも通りに眠っていたら突然テイルズオブエクシリアの世界に飛ばされて…

彼女は、リーゼ・マクシアで何を成すのか…

これは、小さな天使のような、小さな女神様が紡ぐ物語――

――この作品には、テイルズオブエクシリアの二次小説です。
その上、作者が書いているもう一つの作品のネタやキャラ、ネタバ
レなどが含まれています。
そういったものが駄目な方は、ブラウザバックでお戻りください――

只今更新停滞気味…

プロローグ（前書き）

息抜きに書いてみた。

なので更新はG O L Mより遅めです。

できるだけ、ネプテューヌのネタを使わないようにしたほうがいいのかな…

この二次小説は主人公が私の別に書いている小説のオリ主が主人公です。

ですので所々で超次元ゲームネプテューヌの単語などがでてきます、ご了承ください。

そういったものが嫌な方は、ブラウザバックかウィンドウを閉じることをおすすめします。

それでは、プロローグをどうぞ！

プロローグ

「う…ん…あれ…？　ここ、どこ…？」

どうも、おはようございます。初めましての方は初めまして、ゲームギョウ界にある国の一つ、ルウィーの女神候補生、フウです。

さっそくですが、今わたしは真っ白な空間にいます。

あ、決して死んだとかは無いと思います。昨日はちゃんと同じ女神候補生のラムちゃん、ロムちゃんと一緒に寝たはずなので。

でも、今わたしは死んで転生する人とかのテンプレにありそうな真っ白な空間にいるんです。

わけがわかりませんよ…

『ゲームギョウ界の、時を越えて危機を救った女神フウよ…』

はっ！　なにやら声が！　誰です！？

『私は…まあ神とでも名乗っておきましょう。そこで急なのですが、貴女にはこれからある世界へ行って貰います』

はい？　神？　何を言ってるの、この人は？

っていうわたしは女神なんだけど、じゃなくて、え？ ある世界に行ってもらう？

『そこで、貴女にはその世界の危機を救ってほしいのです』

危機を、救う？ いや、あの、超次元もビックリするほどの超展開で言ってる事がよくわからないのですが。

『もちろん別世界なので貴女の行動にも幾つか制限が掛かりますが…その代わり、貴女には能力を授けます』

あ、そうですか、どうも…じゃなくて！ だから話が読めぬと。

『詳しくは後程知れますので、どうかよろしくお願いします』

いやいやいや！ だから待ってって！ 全くと言って良いほど状況が理解できてないから！ っておーいっ！

なんて、一人コントのようなことを言いながら、わたしの意識は闇へと落ちていった。

——これは、ある世界に舞い降りた、一人の小さな天使のような女

神様が紡ぐお話――

TALES OF XILLIA
LITTLE ANGEL
LOLOGUE P

主人公設定（前書き）

10 / 16

服装をわかりやすい物に変更。

主人公設定

主人公設定

○フウ・ルヴィンド

- ・性別：女性
- ・イメージCV：櫻井浩美
- ・容姿 髪：クリーム色で、長さは腰くらい
- ・瞳：少しつり目で青色
- ・服装：黒のゴスロリ服、真っ黒いフード付きマント、頭に黒いリボン。

・年齢：9歳（肉体年齢）

・身長：132cm

・武器：ナイフ二刀流、銃器系

・戦闘タイプ：アサシンガンナー

・特性：我流追撃

・固有サポート：女神の加護

・適正属性：炎、氷（水）、光、闇

・戦闘スタイル

ナイフを両手に一本ずつ逆手に持ち素早い攻撃と移動で敵を翻弄するスピードタイプ。

他にも銃器や火と氷光闇の精霊術、体術を使って戦う。

・固有サポート：『女神の加護』

マスターが気絶した際、暫くの間マスターの周囲に敵を吹き飛ばす防御壁を発生させる。

神と名乗る存在にいきなりリーゼ・マクシアに飛ばされたゲームギョウ界ルウィーの女神。

基本的におとなしい性格だが、たまにメタ発言をすることがある。身長について触れると少し不機嫌になる。

ぺったんこ、だが本人はまだ成長すると言い張っている。

力を全開に引き出すと目の色が紅く変わり、性格が変わる。わかりやすく言うと東方projectのフランドール・スカーレットみたいな感じ。

怒ったり感情が高ぶっても紅くなる。

突然の出来事に弱く、押しに弱い。

少し照れやな所がある上、やっぱり同性に好かれる。

ちなみに女神化はできなくなっている。

神に色々と貰っていて、その一つとして魔物と会話する事ができる。だが、その辺を歩き回っているような魔物には不可能で、一部の知能の高いリーダー格の魔物や知性の高い魔物としか対話できない。

リーゼ・マクシアについての知識は貰った本を読んで、元々の記憶力で理解している。

その他にも、弾丸が自動でチャージされる箱、さまざまな物が入られるポーチなどを貰っている。

元いた世界と違う場所なので、武器は杖ではなくこれまた貰ったナイフと銃器類。

銃器類はハンドガン、リボルバー、ショットガン、サブマシンガン、ライフル、ロケットランチャーなどなど結構な種類を扱う。

魔法も何とか四種類だけ扱えるように頑張っている。

主人公術技（前書き）

物語の進行に応じて増やす予定です。

銃技を少し減らして、体術技を増やしました。

主人公術技

(。の後に連とついた技は派生前の技から続けて発動する)

・武身技

○『魔神剣』

一言わずと知れた定番技。

一地进行う斬撃を飛ばして敵を攻撃する。

「○連『魔神剣・双牙』

魔神剣に続いてもう一つ斬撃を放つ

○『瞬迅剣』

一瞬速の突きを繰り出す。

「○連『空破絶掌撃』

瞬迅剣から敵の背後に回りこみ、ダウンさせるほどの一突きを放つ。

○『空襲剣』

一ダッシュ突きから飛び跳ねるように斬り抜ける。

「○連『崩龍斬光剣』

空襲剣の後、空中からさらに高速で斬り刻む。

○『散沙雨』

一無数の連続突きを放つ。

「○『秋沙雨』

散沙雨よりもさらに連続で突き、トドメに蹴り上げる

○『爪竜連牙斬』

一短剣と足技の流れるような連続斬りを浴びせる。

「○『舞竜連牙弾』」

舞うようなステップを踏みながらの二丁拳銃での連続射撃。

○『ボムスロー』

一手榴弾を三個、後ろに下がりながら広がるように投げつける。

「○連『クイックボム』」

ボムスローがヒットした敵全員の背後に一瞬で手榴弾をばら撒き、撃って起爆する神速の如き武身技。

○『フレアショット』

一ショットガンで炎の散弾を浴びせる。射程は短め。火属性。

「○『ゼロフレイム』」

突撃し、零距离でショットガンをぶっ放す。

○『フリーズバレット』

一リボルバーで氷の弾丸を一発放つ。

「○連『フリーズバレット（連射）』」

フリーズバレットを続けて撃つ、最大六連射可能。

○『メテオバレット』

一飛び上がり、空中からロケットランチャーをぶっ放す。

「○『シューティングメテオ』」

マナで生成した弾丸を装填し、流星群の如く爆撃を降らせる。

○『三散華』

一ミドルキック、回し蹴り、ハイキックの三連続回転蹴りを放つ。

一ラストのハイキックは敵を少し浮かせる。

「○連『三散華・追蓮』」

三散華から続いて体当たりを繰り返す。

当たれば敵を吹き飛ばすが、はずすと転んでしまう。

○『飛燕連脚』

一飛び上がりながらの連続回し蹴りで敵を翻弄する。

一攻撃後、自身は空中に残る。

「○連『飛燕連脚・墜』

飛燕連脚から続いて踵落しを繰り返し、最後に衝撃はで攻撃する。

ダウン状態からすぐさま叩き起こす容赦の無い一撃。

○『獅子戦吼』

一ひざ蹴りで獅子の形をした闘気を叩き付け、吹き飛ばす。

「○『獅子戦吼・壊』

小さくジャンプして地面に向かって闘気を纏ったニードロップを放ち、着地時の衝撃波で周囲の敵を吹き飛ばす。

○『弧月脚』

一月を描くムーンサルトキックで敵を打ち上げる。

「○連『ムーンスナイプ』

打ち上げた敵を素早くライフルで打ち抜く。

○『ピコハン』

一気を高め具現化したピコハンで敵に投げつける。

一意外な攻撃に隙を突かれた敵は思わず気絶しちゃう。

「○『ピコハン落とし』

ピコハンを空高く投げとばし、敵の頭上に落とす。

どうしてピンポイントに敵の頭上に落ちていくのかは、フウ自身も謎に思っている。

○『ドレインナイフ』

ーエリーゼのティポドレインから編み出した武身技。
ー短剣を敵に突き刺してHPを吸収する。

「○『ドレインショット』」

ドレインナイフの射撃版。

遠距離から吸収できる代わりに消費TPが増える。

○『陽炎』

ージュードの集中回避から編み出した武身技。

ー相手の頭上に瞬間移動して斬り付ける。

「○『陽炎・焰』」

陽炎の射撃版。

相手の背後に瞬間移動し、至近距離でショットガンを放つ。

・精霊術

○『ファイアボール』

小さな火炎弾を三発放つ。

ミラやローエンのものと違い、詠唱も効果もヴェスペリア仕様。

○『アイシクル』

対象の足元から鋭利な氷の魂を発生させる。

○『レイ』

上空より無数の光の光線を発射し、敵を焼き払う。

○『ネガティブゲイト』

闇の門を開き、魔空間へ引きずり込む。

○『ヒールストリーム』

範囲内の味方のHPを30%回復する。

・奥義

○『イリユージョンズラッシュ』

―三人に分身し二人が近接・体術で攻め、残った一人が銃器いで援護するソロコンビネーションな奥義。

「○『アブソリュートブレイク』

対象を氷の棺に閉じ込め、刹那の瞬間に短剣での一撃で壊す秘奥義。

どこぞの直視の魔眼のような技だが、実際は一瞬の内に複数の分身でズタズタにしてるだけ。

○『バインドランス』

―対象を拘束しつつ、自身が扱える四つの属性の槍で貫く精霊術奥義。

「○『インディグネーション』

舞い上がる光が敵上空に収束し、その後大規模な落雷を浴びせる雷属性の秘奥義。

本来フウは雷属性の術は使えないが、リーゼ・マクシアに来る前の世界の親友に特訓してもらい、頑張って習得した。

小屋の少女（前書き）

とにかく口調がわからん…あってるかな？

小屋の少女

「う…ん…ここは…」

目を覚ますと、わたしは夕暮れの草原にいた。

ああ、そういえば神とか名乗るやつに違う世界に飛ばされたんだっけ。

く、勝手に話を進めて…次会ったら叩き潰してあげようか…

「…つと、とりあえず、現状の確認だね」

いつまでもぐちぐち言っても仕方ないので、辺りを見回してみる。

どうやらここは普通の草原みたいだ、もう日が傾いてるけど、で、横を見たら隣に袋が置いてあった。

「ん…？ なにこれ、手紙？ なになに…」

袋の上に手紙が置いてあったので、ひとまずそれを読んでみる。

『無事到着したようですね。ではまず貴女について説明します。』

今の貴女には私が授けた能力により、魔物と会話をする事ができるようになっていきます。

ですが一部の魔物としか会話できないので、あまりその辺の魔物に話しかけないようにしてください。

次に武器ですが、そこは貴女のいた世界とは別の世界なので、杖の代わりになる武器を鞆に入れておきました。

今の貴女になら扱えると思います。

最後に、その鞆に入ってるものの説明です。

・武器類 説明不要。

・赤い本 それを読めばこの世界ついてある程度わかんと思います。

・青い本 この世界の初級精霊術についてが書いてあります。

・ポーチ 見た目は小さいですが、なんでも入ります。持ちきれないものなどを入れるといいでしょう。

・箱 これには貴女に渡す武器に役立つ物が自動で補給されます、失くさないようポーチに仕舞っておいてください。

服も少し変えておきました。

あと、そちらの世界で名乗るとき、名前だけだと不自然ですので、フウ・ルヴィンドと名乗ると良いでしょう。

では、どうかご無事で』

…名前については適当に決められた感があるけど、まあいいや。

でも、確かにここは別世界なんだろうなあ、魔力の感じが全然違う。

ともかく、えーと…せーれーじゅっ？　の本は後で読むとして、まずは武器を見てみよう。

んーっと……………

「…何これ？」

袋の中から出てきた武器は、ラスティションで見たようなハンドガン、マグナム、ショットガン、サブマシンガン、ロケラン、手榴弾に、これまたラスティションの傭兵とかが使いそうな片刃のコンバットナイフだった。

…何？　わたしにサバイバルでもしろと？

「…ああ、箱ってこれの弾薬とかの事ね。なんていうか、実質弾薬無限だからチートみたいね。マジエコンにもゲームの弾薬無限にするやつとかあったなー」

ていうか、こんなでかい箱、このポーチに入…ったよ、すごいね…とりあえず、ナイフとハンドガン二丁だけ自分で持って、あとはしまっておこうと。

「で、服装だけど…なんでゴスロリ！？」

確かに体型はそんな感じだけどさ！ あれか、アイツの趣味なんだね！？

「…はあ、もういいや。さて、じゃあこの世界についてわかるとか言う赤い本を読みながら街か村を探そっか。ね、ステラ…」

…あ、そっか、ステラはいないんだよね。

えへへ…いつも一緒だったから、ついクセで…

………

一人ぼっち、かあ…

「うう…ついてないや…」

あれから急に雲行きが怪しくなり、雨が降ってきたのでわたしは雨

の中をフードを被りながら走っていた。

ちなみに、赤い本を読んでこの世界については結構理解できた。

今わたしがいる場所は、ア・ジュールって言う名前の地方のガリー間道という場所みたい。

どうしてわかるかというと、この辺りが夕方だったからだ。

この世界には霊勢という精霊の力のバランスが存在していて、それが偏ると常に夕方や夜になったり山岳地帯や乾燥地帯など自然が変化するみたいで、わたしがいる夕方の地方はこの辺りだけみたいな。

それに、一度キジル海瀑って場所に出たから、今いるのはガリー間道だってわかったということ。

夕方がずっと続くこの地方でも、やっぱり雨だけは降るみたいで、今はこの先にハ・ミルという村に向かっている。

…あ、その他の事についてはwiki参照だからね！。

「ううー、村は…あ、いいところに小屋発見ー！」

周りの景色が少し変わった辺りで小屋が見えてきたので、とりあえずあそこで雨宿りをさせてもらうことにした。

「し、失礼しまーす…あのー少し雨宿りをさせて…」

そう言いながら小屋の扉を開けてみたけど、中には誰もいなかった。

「誰も、いないのかな…？　いや、少しだけ借りちゃおう…くしゅっ！」

くしゃみをしながら、フードを取って近くにあったソファに座る。

いまさらだけど、髪長いのにフード被れるのかとかいうつつこみは禁止だよ。

「……………ん…？」

今、下から物音が…

ま、まさか…幽霊…とか言わない、よね…？

「…ち、地下室あるんだ…ここ…」

少し気になって小屋の中を探索していたら、地下室と思われる場所に続く階段を発見した。

うう…こ、怖いけど…気になるし…うゝ…

「…ちょ、ちょっと、見てみるだけ…確認するだけ…」

でもやっぱり好奇心には勝てず、ゆっくりと階段を下りていく。

…いつもこうやってホラーゲームとかを見せられて後悔してるんだけどね…

「や、やっぱり…」

階段を下りた先には、思ったとおり地下室と思われる扉があった。

びくびくしながらも扉のノブに手をかけ、ゆっくりと扉を開く。

地下室はやっぱり暗く、樽が沢山置いてあることから何かの倉庫だと思われる。

でも真っ暗というわけではなく、樽の隙間から光が漏れていた。

やっぱり、誰がいるのかな…

「誰…ですか…?」

「ひいいやあああっ!!!?!」

「きゃっ…」

こんな状況で、いきなり声をかけられたから、素っ頓狂な叫び声をあげてしまった。

「あ、あの…大丈夫…ですか…？」

「ごめんなさいおねがいですのろわないで…え？ 人間…？」

その場に屈みこんでぶるぶる震えていたけど、もう一度声をかけられて我に返る。

落ちていて声のする方を見ると、そこにはわたしより少し背の高い女の子が変わった人形を抱えて立っていた。

「ご、ごめんね。ちょっと取り乱しちゃって」

「あ、大丈夫…です。えっと、それで…」

「ああ、あの、ちょっと雨が降ってきちゃったから、雨宿りさせてもらってたんだ。…勝手に入ってごめんね？ わたしはフウ・ルウインド。えと、あなたはなんていうの？」

「え、えと…」

わたしが事情を話して自己紹介をすると、黙り込んでしまう女の子。
人見知りなのかな。

「はじめましてー！」

「ひゃああつ！？」

なんて思っていたら、女の子の持っていた人形が急に喋った。

び、びつくりした…

「ぼくはティポだよー。それで、彼女はエリーゼって言うんだ。ぼくはエリーって呼ぶけどね」

「エリーゼ・ルタス…です」

「え、エリーゼとティポだね。よろしくね」

驚いたけど、まああの人形みたいな見た目した黄色くて幼女趣味な変態よりは遥かにマシだよな。

…あれはもう忘れよう。

「そ、それで、エリーゼはここでなにしてたの？　ここ、倉庫みただけど…」

「え、えと…」

「エリーはここから出ちゃダメって言われてるから、ここで暮らしてるんだよー」

「ここに…？」

エリーっていうのはエリーゼの事かな。

でも、出たらダメってどういうことだろう…？

「お友達とか、いないの？　近くは村だし、歳の近い子達くらいはいると思うけど」

「…いないです…わたしはこの子じゃないですから…。友達はデイボだけ…です」

「そう、なんだ…」

このくらいの子なら普通、近い歳の子の友達がいてもいいはずなのに…

もしかして、ずっとここで一人ぼっちだったのかな…？

「…ね、ならさ…わたしと、友達にならない…？」

「え…？」

初対面の子に何を言ってるんだって自分でも思ったけど、気付いたらそう言っていた。

どうしてかな…？ 自分でもわかんないや…

「友達に、なってくれるのー？」

「うん。こんなわたしでよければ、だけど」

「…ほんとに、いいんですか？」

「いいよいいよー。わたしもここに来るまで一人だったしね」

…もしかしたら、やっぱり皆と会えなくて寂しいのかもしれない。

「あ、ありがとう…です。フウ…さん」

「さん付けじゃなくていいよ。その代わり、わたしもエリーって呼んでもいいかな？」

「はい…！ よろしくです、フウ」

「よろしくね」

「えへへ、よろしく。エリー」

急に違う世界に飛ばされて、知らない場所を彷徨った雨の日。

そんな未知の世界で、わたしは初めての友達を作った。

エリーとは、いい友達になれそうだと思った。

もちろん、ティポともね？

――年下――

フ「そういえば、エリーって何歳なの？」

エ「えと、12です」

テ「そう言うフウ君はいくつなのー？ エリーよりもちっちゃいけどー」

フ「え？ え、ええと……き、9だよ！ あとちっちゃいって言わないでっ！」

エ「わたしより、年下ですか？！」

テ「それなのに旅をしてるんだねー」

フ「うん、まあそこそこ戦えるからね。この辺りの魔物なら大丈夫だよ」

エ「すごいです……」

テ「人は見かけによらないねー」

フ「…それはわたしがちっちゃいって言いたいのかな…？」

——ごしっくろりいた——

エ「フウって変わった服着てますよね」

フ「え？ あ、うん。ホントはイヤなんだけど、これしか服がなくてね……」

エ「でも可愛いです！」

エリーゼがフウに抱きつく。

フ「うわわっ、き、急に抱きつかないでよ……」

エ「あ……ご、ごめんなさい……嫌、でしたか……？」

フ「い、いや、別に、嫌って訳じゃ……」

エ「じゃあしばらくこうしてますっ」

フ「う、うう……これも全部、あのアホ神のせいだ……今度会ったら絶対ボコボコにしてやる……うう……／＼／＼」

小屋の少女（後書き）

きつと霊勢でも雨くらい降る…よね…？

ハ・ミルの村と二人目の友達（前書き）

ちよつと書き直しました。

ハ・ミルの村と二人目の友達

あの後雨がなかなか止まなかったので、小屋でエリーと色々話したりした。

その後雨が止んで、エリーにまた来るね、と言ってわたしは一度村に行ってみることにした。

りりあるおーぶ？ とかこの世界の通貨を少しだけ、わたしをここに飛ばしたやつに貰ってるけど、一応アイテムとかも揃えたほうがいいだろうしね。

小屋に行く途中で何度か魔物と戦いになったし、備えておいて損はないだろうし。

ハ・ミルの村は小屋を出てすぐの所にあり、果物のような甘い香りのする村だった。

「うーん…」

というかお店に来てわかった事なんだけど、わたしはこの世界を知ってるかもしれない。

いや、この世界、というよりも、ここに似た世界だけだ。

確かルウィーで一度やったことのある…そう、テイルズオブグレイセスってゲームと出てくるアイテムが同じなんだ。

アップルグミとかパナシアボトルとか、あと通貨の名前、ガルドとか。

でも、あのゲームにリーゼ・マクシアなんて場所は無かったから、きっと別のシリーズなんだろう。

…そういえば、ラストイションで新しいやつが出たとか聞いたなあ…もしかして、それかな？

「…ま、今更どうでもいつか。えと、おねーさん。これとこれ、ください」

「あら、お嬢ちゃん。お使い…じゃないわね。一人？」

「え？ あ、はい。色々あつて旅をしてるんです」

「旅！？ 今じゃ貴女みたいな小さい子も旅なんてするのね」

だあつ！ 言われると思ったよもう！

どの世界でも、この外見だと絶対に子供扱いされたりするのが嫌なんだよ…もう…

「あはは…まあ…」

「ふふ、お姉さん貴女の事気に入っちゃった。少しおまけしてあげ

る」

「えっ！？ わ、悪いですよ、そんなの」

「いいのいいの。ほら、はい！」

そう言うって無理矢理買った物を押し付けてくる店員さん。

最初はもちろん断ろうとしたんだけど…相変わらず押しに弱いせいで結局受け取ってしまった。

はあ…相変わらずだな、わたし…

「…ん…？」

なんて少しだけ凹んでいたら、村のわたしが来た方とは逆の入り口の方が騒がしくなってきた。

なんだろう…鎧を着てるからどっかの兵士っぽいけど…

ともかく、一度戻ったほうがいいかもしれない。

そう思って、小屋のある方への道を歩いていると…

「…エリー？」

「あ、フウ…」

前からエリーが歩いてきた。

でも、エリーって小屋から出ちゃいけないんじゃない？

「フウ君たすけてー！ おっきいおじさんがおいかけてくるよー！」

「むぐっ！？」

とか考えていたら、ティポがそう言いながらわたしの顔に噛み付いてきた。

ティポを引き離そうとみよんみよんと引っ張る。

…なんだろう、不意に日本一さんの顔が頭に浮かんできた。

「むー、むーっ…！ ぷはっ！ てい、ティポ、急に噛み付かないでよ…」

「いいからたすけてーっ！」

そういえば、おっきいおじさん…？ 確かエリーを閉じ込めた人だっ…

「…っ！ エリー、ティポ、掴まって！」

「え？ きゃあっ！？」

「わあーっ！？」

エリー達の背後から誰かが来る気配がしたので、咄嗟に二人（一人と一匹？）の腕を掴んで近くの木の上に跳ぶ。

「落ちないように、しっかり掴まってね。あと声も出さないように」

「…………（くくくく）」

わたしが声を出さないようにと言ったからか、無言で頷くエリー。

ティポもエリーにくっ付いたまま黙っている。

「むう…娘っ子め。どこに行きおったのだ…小屋からは出るなど言っただけなのに…」

道の向こうからやってきたのは、確かにエリーの言ったとおりおっきいおじさんだった。

…何食べてたらあんなになるんだろ…

「…む、ラ・シュガルもんめ、まだおったのか!」

そのおじさん——ジャオって言うらしい——は、さっきわたしが見かけた兵士達を見ると、ハンマーを取り出してそっちへ向かっていった。

「…………よし、行ったね。エリー、降りるから掴まって」

「は、はい…」

ジャオさんの姿が見えなくなったのを確認してから、エリーを掴まらせ、下へ降りる。

「よっ…と、大丈夫?」

「だ、大丈夫…です」

「でもびっくりしたよー」

「ふふ、ごめんね。ともかく一度小屋に戻ろう?」

「はい…」

また戻ってきて面倒な事になってもあれだし、とりあえず小屋に戻ることにした。

「それにしても…あの兵士達はなんだったんだろう…？」

「わたしにも、わかりません…」

小屋の地下室に戻ったわたし達は、わたしがさっきお店の人に商品と一緒に買ったナップルを食べながらさっきの兵士達について話す。

「あ！　そういえばさっきの人達が関係してるんじゃないかなー？」

ティポが何かを思い出したのか、そんなことを言った。

「さっきの人達…？」

「あ…さっき…兵士が邪魔だと言ってた人達がいて…」

「ふむう…」

もしかするとその人達があの兵士達追われて、それで追いかけてきた。とかだったりして…？

「それにしても…さっきのフウ、凄かったです！」

「ん、そう？」

まあ、確かにこの見た目で、年上の子の手を引っ張って近くの木の上まで跳ぶなんて普通はありえないか。

「ほんとにすごかったよねー！ エリーとぼくを連れてあつという間に木に登ったんだからねー」

「ああ、まあ、慣れだよ、慣れ」

そういえばあの時気付いたんだけど、なんかこの世界に来てから身体が身軽になってるんだよね、女神化した後並に。

あと女神化もできなくなってるし、いやまああれは目立つからやる気なかったけどね。

…頑張れば瞬間移動みたいなことできるかな？

「…な、慣れであんなことできるんですか…」

「なんていうか、すごいねー」

そんな話をしていると、急に睡魔が襲ってきた。

「ん…ふあ………」

「あれー？ フウ君眠いのー？」

「ああ…昨日から全然寝てないからね…」

「そうなんですか？ なら、寝たほうがいいですよ」

「うん…ありがとう…それじゃ、ちょっとだけ休ませてもらうね…」

わたしはエリーの言葉に甘えて、少し眠ることにした。

「…んう…」

目を覚ますと、エリーが掛けてくれたんだろっ、毛布がかけられていた。

でも、肝心のエリーとティポの姿が見えない。

「…どこ行つたのかな」

ここに居ないってことは…村？

でも、村からは疎まれてるって…

ここでじっとしてても仕方ない、とりあえず村に行ってみよう。

「出て行けよ、おら！」

「疫病神！ あんたなんかいるからっ！」

「きゃっ…やっ…」

「やめて！ ヒドイことしないで、お願いだよー！」

村に來ると、エリーが村の人達に石を投げられていた。

なんで、どうしてこの人達はこんなことをしているの？

気が付けば、わたしはエリーの前に立っていた。

「何、してるんですか」

「なんだお前は！」

「ふ、フウ…」

「わたしの事なんてどうでもいいの。それよりどうしてこの子に…
エリーにこんな事してるのかって聞いているの」

「お前みたいなガキには関係ない！」

何なの、こいつら。

エリーが何をしたって言うの？

あんたらが怪我してるのなんて、エリーは関係ない。

なのに、こんな小さい子に、こんな事して…

訳が分からない。

「…自分勝手な人間が…」

「…フウ？」

「とにかく、よそ者はさっさと出て行け！」

そう言つて、村人の一人がわたし達に石を投げようとする。

しかし、それはどこからかやってきた一人の男の人に止められる。

「お前っ！？」

村の人は、その人を知ってるみたい。

男の人はそれからゆっくりこっちへ来て、大丈夫？ と聞いてくる。

「「……………」」

でもわたし達は何も言わない。

わたしはまだこの人を信用してないからだけど、エリーは単に人見知りしてるだけみたい。

その後村長っぽい人が来て、怒鳴ってから村人と一緒にどこかへ行ってしまった。

「…行く、エリー」

「……（くっ）」

ともかくこれ以上ここにおいても面倒なだけ。

わたしはエリーを連れて小屋に戻ることにした。

「大丈夫？」

「はい…大丈夫…です」

再び小屋に戻ってきたわたしは、石をぶつけられて少し怪我をしたエリーの手当てをしていた。

小屋に道具があつてよかった。

「でもヒドイよねー、エリーは何もしてないのにー！」

「確かにね…いくらなんでも石をぶつけるのは酷いと思う」

「でも、優しい人もいます…」

「…優しい人？」

エリーの言葉に、思わず聞き返すわたし。

「は、はい。いつもご飯、持ってきてくれる人もいますし…」

「雨漏りした時、直してくれたりー」

「わたしの髪を切ってくれたりもしました」

「ふうん…」

皆が皆あんな酷い人って訳ではないって事かな…

「…っ！ 誰か来たっ！」

そんな時階段の方から足音が聞こえてきて、わたしは咄嗟に短剣を構えてエリーを庇うように立つ。

やってきたのは、さっきの男の人だった。

「ま、待って！ 僕はいじめたりしないよ」

「……………」

完全に信用したって訳じゃないけど、まあさっきは助けてくれたんだし、とりあえず短剣を仕舞う。

でも、いつでも取り出せる体勢ではいるけど。

「こんにちは。そっちの子は知らないけど、君は前にも一度会ったよね？」

前に？ ああ、エリーが言ってた兵士が邪魔って言ってた人達って、この人か。

そう言われても黙ったままのエリーだったけど、エリーの代わりにティポが声を発した。

「こんにちはー！」

それに驚いたのか、男の人は思いつきり尻餅をついた。

流石に驚き過ぎな気がするけど…

「あらー、お兄さん結構臆病だねー」

「…ぷっ…」

あまりの驚きっぷりに、思わず吹き出してしまふ。

ああ、もう、警戒心も何も、どっか行っちゃったよ。

「てい、ティポ…名前なの」

「彼女はエリーゼって言うんだ、そっちの子はフウ君。ばくとフウ君はエリーって呼ぶけどね。よろしくねー」

と、尻餅をついた男の人にエリーがティポを、ティポがエリーとわたしの紹介をする。

「は、はは…よろしく…三人とも」

「あ、あの…だいじょうぶ…えと、ですか？」

この人は怖くないと判断したのか、エリーは男の人に近寄ってそう聞いた。

「う、うん。ちょっとびっくりしたけどね。僕はジュード、ジュード・マティスっていうんだ」

「わ、わたしは…エリーゼ・ルタス…です」

「くく…わたしはフウ・ルヴィンドだよ」

ジュードさんが自己紹介をして、わたし達も改めてもう一度自己紹介をする。

わたしはまだ少し笑っちゃってたけどね。

「ジュード君！ さっきはありがとうー」

「…ありがとうございます」

「わたしからも、ありがとう」

わたし達はさっき助けてもらった事にお礼をする。

お礼は大事だもんね。

「何があつたの？ よかったら聞かせてもらえないかな」

ジュードさんがエリーにそう聞いて、ティポがその質問に答える。

最初の方はわたしも知っていたけど、後半は寝ていたので知らなかった。

ジャオさんはあの兵士達を倒した後どこかに行ってしまったみたいで、そしたらあの兵士達が村の人達を襲い始めたという。

それで気になって外に出て行ったら、ああなつたみたいだ。

「もー、ヒドイよねー！」

「……………」

「ジュード…さん？」

その話を聞いて、ジュードさんが黙り込んでしまつた。

一体どうしたんだろう？

「あ、ごめんね。エリーゼとティポとフウは、ここで他のお友達を待ってるの？」

その質問に、エリーは表情を曇らせる。

「…お友達…フウしかいないから…」

「んー、わたしも友達は、エリーしかいないよ」

「じゃあ、僕が二人の二番目の友達だね」

「「え？」」

ジュードさんの言葉に、二人して思わず声をあげてしまう。

「あ……」

それでもそれが嬉しかったみたいで、頬を赤らめて嬉しそうな顔になるエリー。

「わーい♪ 友達ー♪ ジュード君は友達ー♪」

それにティポがおおはしゃぎする。

……なんてだろう、ゲームギョウ界でやった別シリーズの王子様を思い出した……

「……エリーゼ、フウ。君達の事、僕の友達に話していい？」

ジュードさんは少し黙ったあと、そんなことを言って来た。

「どうしてですか？」

「君達が村の皆にいじめられてるのがイヤなんだ。だから友達と何とかできないか考えたいんだよ」

…ははあ、ジュードさんって極度のお人よしタイプかな？

なんか、そんな感じがした。

「うん！ ジュード君は友達だから、ジュード君のことは信じちゃうよ！。ね、エリー？」

「……………（こくこく）」

エリーは少し考えた後、エリーの代わりにティポが答え、エリーもそれに頷く。

…この二人は考えがリンクでもしてるんだろうか。

「わたしも、ジュードさんを信じるよ」

「ありがとう、二人とも。じゃあ、ちょっと待ってて」

そういつてジュードさんが立ち去ろうとするけど、エリーがジュードさんの腕を掴んで引き止める。

「…一緒に行く?」

「……………」

「当たり前だよ。可愛い女の子を二人置いて行っちゃダメだよー?」

エリーは無言で、だけど笑顔で、

わたしは冗談っぽく言いながら、肯定する。

「あはは、そうだね。それじゃ、行こうか」

ということで、わたし達はジュードさんに連れられて小屋を出た。

ハ・ミルの村と二人目の友達（後書き）

ヘンなところで終わった感が…

このイベントって、ジュード達が最初にエリーゼと会って一日も経ってない、よね…？

うん、プレイヤーが宿に泊まらなければ経ってないはず、きっと。

ちなみにフウがティポった時に日本一が出てきたのは、言わずもがな中の人ネタです。

で、王子はきつとご存知虎祭兄貴です（笑）

旅立ち（前書き）

学園衣装を買ってみた、というか学園BGMがカッコよすぎ。

自分で見直して、この章のタイトルでセフィロス思い出したっていう。

10 / 18

魔装獣イベントすっかり忘れてた…

とりあえず、これでいいかな…？

旅立ち

ジュードさんに連れられてまた村に來ると、ジュードさんはさつき一緒にいた人達と話し合いを始めた。

待つてる間暇なので、わたしは精霊術の本を読み、エリーはティポでドリブル？ をしながら時間を潰す。

にしてもなにこれ、可愛い。

まあそれは置いといて、少してジュードさんがこっちにやってきて、一緒に行かないか、と言ってきた。

特に行くあてもないし、まあいいかな。エリーも一緒に行くことにしてみただし。

その後村を出るとき、エリーが村の人に手を振ったけど、誰も返さなくて、みんなエリーから目を逸らしていた。

「……………」

「エリー…行く…？」

悲しそうな表情のエリーにそう声を掛け、待っていていたジュードさんの後に続いて村を出る。

…村を出る間際、一部の人だけこっちを見ていた。

ジュードさん達についていく事にして、それからイラート間道で、

「そういえば、まだちゃんと二人を紹介してなかったね」

魔物達が少ない辺りでジュードさんがそう言って、わたしとエリーは自己紹介をすることに。

「エリーゼ・ルタス…です」

「えと、フウ・ルヴィンドだよ」

「ふーん。こりゃ二人とも、五年後にはすっごい美人になるな」

自己紹介を終えると、背の高い、どこか胡散臭い男の人がそう言うてきた。

なんていうか、平気で浮気とかしそう。そんなイメージ。

「俺はアルヴィン。そんな時までよろしく、な」

「そんな…わたし…」

「あー、これってナンパだー！ アルヴィン君はナンパマンー」

「こんな歳のわたし達にナンパなんて、アルヴィンさんはロリコンなの？」

「ロリコンじゃねーよっ！」

そんなわたしの言葉に反論するアルヴィンさん。

「…で、このぬいぐるみは、なぜ喋っている？」

そう言うのは、確か…ミラ・マクスウェルさん、だっけ？

精霊の主と同じ名前だし、色々と不思議な人だな、と思った。

「え…？ テイポは昔から喋ってた…です」

「だよなー」

「あ、そうだったんだ？」

それはわたしも知らなかった、というか聞いてないし。

何か仕掛けで喋ってるのかと思ってたよ。

「私がおかしいのか？」

「つたりまえでしょ」

ティポの言葉にあわせて頷くエリィ。

いや、ミラさんは何もおかしくないよ。

「うゝむ、ぬいぐるみに反論されるとは、不可思議な事もあるものだ……」

わたしとしては、ミラさんの格好とか髪の色やつかの方が不可思議に思えるけど。

短い自己紹介を終えて、イラート海停に到着。

どうやらジュードさん達の行き先は海を渡った先らしい。

「あの、イル・ファンに行く船はいつ出ますか？」

イル・ファン。

医学校とか精霊術の研究所とかがある、ラ・シュガルの首都、だね。

あ、もちろん本の知識だよ？

ジュードさん達はそのイル・ファンに行きたいのかな。

「すみません。首都圏全域に封鎖令がたおがけで全便欠航なんです」

全便欠航？ 何かあったのかな？

「他の便は？」

「しばらくは…サマンガン海停行きしか出ませんね」

それを聞いたジュードさんが少し考えた後、サマンガン海停行きの船に乗ると言った。

あれ、イル・ファンに行きたいんじゃないんだ？

船に乗ろうとした時、アルヴィンさんが鳩で手紙を受け取ってるの

が見えて、ジュードさんについてエリーと一緒にそっちへ行く。

どうやら、誰かと手紙のやり取りをしてるみたいだ。

…わざわざ鳩で手紙のやり取り…？　なんか怪しいなあ…

それからすぐに船は出航し、大海原へと出発した。

「わあ…！」

「エリー、もしかして海初めて？」

「うん…！」

どうやらエリーは海を見るのが初めてらしく、はしゃいでいた。

「…って、ちょ！　エリー危ないって！」

「きゃ！」

ちよっと目を離れた隙に、エリーは船から身を乗り出して下を見ていた。

落ちたら危ないからそれを引っ張って下ろす。

「あははは。ティポ見て」

「海すごーい！ 落ちたら死んじゃうところだったよー」

「ホントに洒落にならないからやめてね…」

もう、見てるほうはヒヤヒヤしたよ…ジュードさん達も何事かとこっちみてるし…

それから少しして、エリーがミラさんの所に行ってしまったので暇になり、近くにあった樽の上に座って精霊術の本を読み始める。

何事も、基礎が大事だからね。

「何読んでるの？」

「っ！？」

そこに、ジュードさんが声を掛けてくる。

急に声を掛けられたので、思わず飛び退いてしまう。

「あ、ご、ごめんね？ ちょっと驚いただけだから…」

「そ、そう？」

そう言ってまた樽の上に上りなおす。

ふう。背が低いと上るのも一苦労だよ。

「ハ・ミルでもそれ読んでたけど、何の本なの？」

ジュードさんが隣の樽に座って訊いてくる。

「え、えと…せ、精霊術の本、だよ」

正直言うと、今まで男の人と深く関わる事が一度もなかったせいで、恥ずかしいというか、話しづらいというか…そんな感覚に陥っている。

隣にエリーとかがいればまだ平気なんだけど、一対一とかだと、やっぱり慣れない。

「へえ、精霊術の勉強してるんだ。フウは偉いんだね」

「っ…！」

そう言っただけで寝ながらわたしの頭を撫でてくるジュードさん。

最初はびっくりしたけれど、不思議と嫌な感じはしない。

「…あうう…」

けれどやっぱり恥ずかしくなって、思わず本に顔を埋める。

くう…いつもなら子供扱いするな、とか反論できるのに…ほんとに調子が狂うよ…

と、そんなことがあったりしたけれど、その後はジュードさんとアルヴィンさんが何かを話してたくらいで特に何も起こらず、無事に船は目的地へと進んでいった。

そろそろ目的地に到着するとの事なので、ジュードさんとアルヴィンさんに連れられてミラさんとエリーの所へ行く。

「ミラ、エリーゼ」

「ああ。そろそろ到着のようだ」

「さて、ラ・シュガルの警戒がどれほどのものなのか、な」

ジュードさん達が話してる横で、エリーが話しかけてくる。

「フウは何してたんですか？」

「ん、ずっと読書だよ。他にやることないし」

「え…？」

「あれからずーっと本読んでたのー?!」

あれから…？ …あ、もしかして読んでいるときに一度来たのかな？

「ごめんごめん。わたし、本読んでいる時とかたまに熱中すぎて自分の世界に入っちゃうことがあるみたいで、そうになると本以上に気を引くことでもしないかぎり話しかけても無駄になるから…」

「そ、そうなんですか」

「そーゆーことは先に言っただよー」

「あはは、だからごめんって。それでエリー達は何してたの？」

「ミラと…お話、してました」

「ミラ君は友達、友達ーっ♪」

「……………」

友達…に、なったの…？

なんかすごいそっぱ向いてるんですけど…ジュードさんも苦笑いだし。

「大丈夫、何も心配いらないよ」

最後にジュードさんがこっちに来てそう言ってきた。

船を降りた後、またアルヴィンさんやジュードさんが警備とか兵士に注意とか言っていた。

やっぱり追われているのかな、この人達…

で、やっぱり目的地はイル・ファンに変わらないみたいで、海停が封鎖されていたからサマンガン海停から回り道をすることにしてみた。

「…ごめんね、エリーゼ、フウ。大きな街に着くまで、もう少し待ってね。そしたら、きっと引き取ってくれるいい人がいると思うんだ」

「はえ？　引き取る？」

「…え、でも…わたし…」

「ジュード君、それなんのことー？」

はつきし言って、いきなりそんな事言われてもわかんないと思う。

多分、身寄りが無くなったからどこかに引き取ってもらおうと思ってるんだろうけど。

「いきなり引き取ってくれる人がどうかお嬢ちゃん達に言ってもね。聞かされてない本人は、そりゃ驚くよな」

「気遣い、が足りないな。ふふ」

「ただガキなんだよ…」

ジュードさん、凄い言われようだね…この距離じゃ聞こえてないだろうけど。

じゃあなんでお前は聞こえるんだよって？ 耳が良いんだよ。

ただ、最後のアルヴィンさんの一言はかなり小さかったけどね。

そんなこんなで、わたし達はイル・ファンに向かうジュードさん達についていく。

その途中、妙なおじさんに魔装獣という危険な魔物がいるということを知り、皆で注意しようと言ってサマングアン海停を後にした。

——ワザと？——

フ「……………」

ジ「フウ？ フウー！ 聞こえてるー？」

テ「ジュード君ー。今フウ君に話しかけても無駄だと思うよー」

エ「フウは…本を読むのに熱中すると自分の世界に入っちゃうって…言っていました」

ア「へえー…どれどれ？」

アルヴィンがフウの頬をつつく。

フ「……………」

ミ「ふむ。確かにこれだけつつかれてるのに、何も反応を示さないな」

ジ「うーん…そろそろ先に進みたいんだけど…フウがこれじゃ、待
つしかないかな…」

フ「あ、行くの？ …って、アルヴィンさん、何してるの…？」

ア「うおっ！ 急に喋るなよ！」

フ「いや、そんなこと言われても…というかやっぱりアルヴィンさ
んはロリコンだったんだね」

ア「だーっ！ だからロリコンじゃねーっつーの！」

二人から少し離れた場所で、

ミ「…足手まといになるかと思ったが、そうでもなかったな」

ジ「…フウ、本当はワザと話を無視してるんじゃない…」

エ「そ、そんな事ないと思うです…多分…」

テ「よくわからないねー、フウ君はー」

ミ「…お前が言うのか？ それを」

——抱き心地——

フ「はー…。ティポって丁度良いやわらかさで抱き心地いいよね」

テ「そういうフウ君も大きさに抱き心地よさそうだねー」

フ「…ティポ？ それは遠まわしにちっちゃいって言うてるのかな？」

テ「わー！ 引っ張らないでー！」

エ「……………」

エリーゼがフウを抱きしめる。

フ「ひゃわっ！ え、エリー？」

エ「…フウ、抱き心地最高…です」

テ「ほらー、エリーもこう言ってるでしょー？」

フ「い、言ってるけど…その…は、恥ずかしいんだけど…」

エ「」

フ「あうー…」

ジ「あの二人、本当に仲がいいんだね」

ア「にしても、フウ姫はエリーゼ姫より小さいのに、どこか大人びてるよなー」

ジ「確かに、雰囲気がそんな感じだよね」

フ「え、エリー、そろそろ放して…」

エ「嫌です」

フ「ううー…」

ア「ま、今は子供にしかみえないけどな」

ジ「あはは…」

樹界での初戦闘（描写的にboyfウ）（前書き）

とりあえず戦闘描写いけたし、ネプテューヌの方も書いていかないとなあ…

樹界での初戦闘（描写的にboyフウ）

サマングン海停を出たわたし達は、ひとまずカラハ・シャルルを目指すことにし、サマングン街道を進んでいた。

どうでもいいけど、サマングンってサブマシガンみたいな名前だよな。

ま、それは置いて、途中、魔物に襲われたときに魔物こつちに来て、ジュードさん達の方に蹴り返したりしながら進んでいくと、検問が見えてきた。

「検問か」

「ま、当然だな。そんなにうまい話はないって」

さっきサマングン海停で少し休んでたときに見た手配書でわかったことなんだけど、やっぱりこの人達は追われてるみたいだった。

書いた人がどんな人が少し気になるくらい酷い絵の手配書だったけど、辛うじてそれがジュードさんとミラさんだとわかった。

「どつしよつ…」

「ねえ、あっちの崖の上は何があるの？」

左側を見たら、崖の上に道があったので聞いてみる。

「あっちは樹界なんだ」

「上手く抜けると、カラハ・シャルの街に出られるが……」

「迷う必要はないな」

それを聞いて迷わず樹界方面へと歩き出すミラさん。

「滅多に人が立ち入らないんだよ？ エリーゼとフウには……」

「こうなることは予期できたらう」

「……………」

そんなミラさんを止めようとするジュードさんだけど、言い返されて黙り込んでしまう。

「…わたし…あの、だいじょうぶ…です。だから……」

「ケンカしないで！。友達でしょー」

「ほら、わたし達なら大丈夫だよ。魔物がこっち来たらさっき見た

いに蹴り飛ばしちゃうから」

自分が原因で二人が喧嘩してると思ったのか、エリーが二人にそう言う。

うん、喧嘩はよくないよね。

「エリーゼ…フウ…」

「二人も了解した。これで文句はあるまい」

そう言つて、ミラさんは先へ行ってしまう。

樹界…危ないところっぽいけど、エリーはわたしが守らなきゃ。

「この辺りに、詳しいん…ですね」

「樹界に入るのは初めてだけだな。ま、何事も経験だ」

「そだよー、こういう経験は若いうちにおかないと」

「最年少のお前が言うとなんか変だな…」

ミラさんとジュードさんから少し離れた後ろの方で、そんな会話をしながらわたし達は樹界へと足を踏み入れた。

「深そうな森だな」

「まあ、樹界って言われてるくらいだもんね」

「はぐれないように気をつけなきゃ」

ジュードさんの言葉にはぐれないよう、できるだけ固まって進んでいく。

すると突然、ガサガサ、という物音と、どこからか視線を感じた。

「…あ」

視線を感じた方向へと、一匹の狼型の魔物がこちらを見ていた。

…？　なんだろう、そこら辺の魔物と違う…

…誰かに従わされてる…？

その魔物は、暫くこちらを観察した後、どこかへと行ってしまった。

「何だ？　ありゃ…」

「警告かな…これ以上立ち入るなって」

「…違う。あれは誰かの支配下にいる魔物だ…」

「え…?」

「なんでそんなことがわかんのか?」

何故と聞かれても、ぶっちゃけ魔物と会話する能力があるみたいだけどいまいちよくわかってないし。

「わたしにもよくわからないんだけど、たまに魔物の言ってる事が理解できたり、気持ちがわかったりするんだ。で、アイツからはそこら辺の魔物とは違う感じがしたし、誰かに知らせに行く感じがしたから…」

「ふむ…イバルのほかにそのような能力を持つ者がいたとはな」

「とにかく、用心するに越したことはないね」

ジュードさんの言葉に頷きながら、奥へと進んでいく。

途中で小道を通ったりしたけど、身長の高いわたしやエリーは楽に通れた。

「やれやれ、狭い道は苦手だよ」

逆に背の高いアルヴィンさんは通るのが大変そうだった。

さらに奥に進んでいくと、行き止まりに当たってしまった。

でも、この蔦をつたっていけば、進めるかも…

そんな時だった。

「…！ 敵！」

後ろから樹のような魔物が襲ってきた。

その魔物に対しわたし達は安全な場所へ移動し、ジュードさん達が武器を抜いて戦い始める…けど、

「うっ！」

「こいつ、攻撃範囲が広い…全員がダメージを食らっちゃまずぞ」

「やっかいだな」

どうやら苦戦してるみたいだ。

そんな時、エリーがジュードさん達の方へ向かっていった。

「エリー！？」

「エリーゼ、来ちゃダメだ！」

「お前を庇いながらでは戦えない、邪魔だ！」

「ジュード！」

その隙を突かれ、ジュードさんが魔物に吹き飛ばされる。

「う…」

「言わんことではない！」

そこへ、エリーがジュードさんの傍に駆け寄ると、回復術を発動させた。

これにはわたしも驚いた。

「これは、みんな一斉に…！？」

「エリー、精霊術使えたの！？」

「元気出して！ ぼくたちがいるよー！」

ティポがそう言いながら、エリーが杖を取り出して前線へと出る。

「お嬢ちゃんは下がってる！」

「わたしだって、役に立ってます！」

その時、エリーに向かって魔物の鞭のような腕が伸びる。

「きゃっ…！」

「エリーゼ！」

だけど、その腕はエリーに届くことはなかった。

なんでかって？ そりゃあ…

「まったく、お転婆なお姫様だね！」

「フウ！？」

わたしが腕を弾いたから、だよ。

「ほらほらジュードさん、驚いてる暇があったら目の前の敵をどうにかしてね!」

そう言つて二本のナイフを逆手に持ち、魔物の方に向く。

え? ナイフは一本じゃないのかつて? いやいや、二本ですよ? 最初から。

べ、別にそういう描写を忘れてたとかじゃないんだからね! ホントだよ!

「さ、行こう! エリー、行ける?」

「...はい!」

エリーに声をかけ、初めての^{リンク}「共鳴する」。

「行くよ? エリー!」

「了解です! フウ!」

そしてそのまま^{リンクアーツ}「共鳴術技を発動する」。

「「ピコピコハンマー!」」

二人で同時にピコハンを連続で投げつけ、気絶させる。

「今だよ！」

「了解した。アルヴィン！」

「あいよ！」

「紅蓮剣！」

続いてミラがアルヴィンと共鳴し、炎の闘気を飛ばして攻撃する。

「トドメ行くよ！ ジュードさん！」

「う、うん、わかった！」

今度はジュードさんと共鳴し、

「魔神連牙斬！」

二人で交互に魔神拳と魔神剣を放ち、最後に同時に衝撃波を発生させて攻撃する。

それにより、魔物は絶命した。

「大勝利ー！」

「すごいよ、二人とも！」

「エリー、大丈夫？」

「まだ震えが止まりません…」

そう言ったエリーは、確かに小さく震えていた。

精霊術を使えるのは知らなかったけど、多分戦闘は始めてだったんだろうね。

わたしは、震えるエリーの頭をそつと撫でてあげた。

「まさかこの歳で、こんな術が使えるとはね」

「エリーゼに救われたな」

「うっう」

「エリーゼ。もう怖くないよ」

「違うよ、ジュードさん」

エリーの頭を撫でながら、そう言う。

「仲よくしてよー。友達は仲よしがいんだよー!」

「わたし…邪魔にならないようにするから…だから…」

「エリーは自分のせいでジュードさんとミラさんが喧嘩したと思ってたんだよ」

「…だってさ。二人に免じて許してやれば?」

「免じるも何も、別に私は怒ってなどいないが…」

いや、怒ってるようにしか見えなかったよ。

「ウソーン。ミラ君とジュード君、もっと仲よしだったもんねー!」

ほら、ティポもこう言ってるし。

「わたし…がんばるから…!」

「わたしだってがんばるよー?」

それに、わたしだってパーティーの空気が重いのはイヤだしね。

「いつの間にか私が悪者か…ふふ、わかったよ」

「ほれ。二人に言うことあるだろ?」

アルヴィンさんがジュードさんとミラさんの肩に腕を回しながらそう言う。

「心配かけちゃってたんだね。エリーゼ、フウ、ありがとう」

「やっぱり友達はニコニコ楽しくだねー!」

「ミラもエリーゼの術があれば頼もしいでしょ」

ジュードさんにそう聞かれたミラさんは、エリーを見てにっこりと微笑みながら。

「ありがとうエリーゼ。これからはアテにするぞ」

と言った。

「…って、ねえねえ、わたしはー？」

「ああ、もちろんお前もアテにさせてもらっぞ。フウ」

「えへへー」

よかった、忘れられてなくて。

…前に一度、友達に忘れ去られたことがあったからね…

「それじゃ、レッツゴー！」

ということで、わたし達は出口を目指して樹界を進んでいった。

「あんな術者と一緒ね…運いいわ、俺」

「……………？」

途中、そんなアルヴィンさんの台詞に不信感を抱きながら…

——子供扱いしないで——

ア「しっかし、フウ姫あんだだけ強えのになんで今まで戦闘参加しなかったの？」

フ「最初は手伝おうとしたよ？ でも、ジュードさんが危ないからって戦わせてくれなかったんだもん」

ジ「だ、だって、フウくらいの子がそんなに強いだなんて思ってなかったし」

フ「む……子供扱いしてたって事だよな？ 見た目で判断しちゃダメだよー？」

ア「そうだぞー、優等生君？」

フ「アルヴィンさんだって子供扱いしてたよ」

ジ「フウは子供扱いされるのが嫌なの？」

フ「うん。見た目が子供ってだけでバカにされたりするんだもん」

ア「だけど見た目はエリーゼ姫よりも子供だもんなあ」

フ「だから子供扱いするなっていつてるでしょーっ！」

アルヴィンの髪を引っ張るフウ。

ア「あだだだ！ 髪を引っ張るなって！」

ジ「あはは…普段のフウを見たら、子供にしか見えないと思うけど
なあ…」

樹界での初戦闘（描写的にboyフウ）（後書き）

― 今回の共鳴術技 ―

。ピコピコハンマー〃ピコハン（フ）+ピコハン（エ）
フウとエリーゼが二人で一緒にピコハンを投げまくり、敵を気絶さ
せる共鳴武身技。

樹界を駆け抜けて（前書き）

とりあえず投稿はしておきたいと思ったので。

スキットは次回に回すことにしました。

樹界を駆け抜けて

「揺らめく焰、猛追！ ファイアボール！」

詠唱を終え術名を叫び目の前に短剣で素早く魔方陣を描くと、三つの火球が放たれる。

それは真っ直ぐに魔物へと飛んでいき、焼き尽くした。

ということでききなり戦闘中ですが、フウ・ルヴィンドです。

詠唱文は多分別シリーズに当たる作品から取ってきたやつ。

「ふ、フウ！ 後ろ！」

エリーのそんな声が聞こえてきて横目で後ろを見ると、狼タイプの魔物（さっき見たヤツとは違い、野生）がわたしに飛び掛ってきていた。

けど別に慌てたりはしないで、サブマシンガンを取り出して後ろに撃つ。

耳元で撃つ形になったので少し耳が痛いけど弾はほぼ命中したみたいで、狼タイプの魔物は悲鳴のような声を上げて吹っ飛んだ。

「はあ…これで終わりだね」

周りに魔物の気配が無くなったので、武器をしまつて息を吐く。

「す、凄いねフウ…」

「流石の俺でも敵を見ないで撃つなんてのは難しいぞ…?」

「フウ君、ちょーつよい!」

「ふふ、ありがとティポ」

皆からそれぞれの感想をもらつて、目の前に飛んできたティポの頭を撫でる。

「そつえば、フウの使う武器ってアルヴィンのと似てるよね」

「ああ、これ?」

そう聞かれて、ハンドガンを一つ出して見せる。

ジュードさんが言ってるのは多分このことだろう。

「そついやそうだな。それ、どこで手に入れたんだ?」

「さあ？ 知らない。貰い物だし、これ」

そういわれてみれば、アイツはどこから持ってきたんだろう。

まさかとは思うけど、権力の無駄遣いとかして手に入れた、とかじゃないよね…？

「貰い物？ 誰に貰ったんだ？」

なんか、アルヴィンさんがやけに食い付いてくるなあ。

「んと、忘れちゃった。リリアルオーブとかもその人に貰ったんだけど」

それを聞いたアルヴィンさんは、何やら考え込んでしまう。

…なんなんだろう…？

「それより、先に進まなくていいの？」

「む、そうだな。皆、先を急ぐぞ」

「あ、待ってよミラ！」

話を終わらせたくてそう言うと、ミラさんが反応して先へと進んでいく。

それを慌てて追いかけていくジュードさん、まだ不思議に思いながらもそれに続くアルヴィンさん

そして、わたしを抱きしめながら三人を追いかけるエリー。

……いやいや。

「あ、あの、エリー？　なんでわたしを抱きしめてるの？」

「ぎゅってしたいからです」

いやいやいや…それは理由になるのかな？

「それじゃ、ぼくはこっちー」

「わわっ」

そう言ってティポがわたしの胸に飛び込んでくるので、いつものエリーみたいに抱きしめるような形になる。

「…ダメ…ですか…？」

「う…」

その顔は反則だと思う。

結局わたしは押し負けて、エリーに抱っこされて進むことになったのでした。

意外と力あるのね、エリー。

…というか、いつまでたっても押しに弱いんだよね、わたし…

「そういえば、フウはさっき武器と一緒に貰ったと言っていたが、エリーゼはどこでリアルオーブを手に入れたのだ？」

皆に追いついた後しばらく歩いていると、ミラさんがエリーにそんなことを聞いてきた。

「えっと…気がついたら、ティポの中にあっただんです」

「落ちてたんだよー。きれいだったから、ついー」

「「食べたの!?!」」

ティポの言葉にジュードさんと同時につつこむ。

「ま、いいじゃないか。持ってなかったら、今頃魔物にやられてたよ」

まあ、確かにね…

「それにしても、戦いの道具でありながらかくも美しい…このようなものを作り出す人間は、やはり素晴らしいよ」

「…妙な物や、危ないモンを作るのも人間だけだな」

「そうだな。その二面性も、人間が人間たるゆえんなのだろうが…」

「…人間、か…」

この世界に来て再確認した事だけれど、やっぱり人間ってというのは皆が皆良い人って訳ではないんだ。

ハ・ミルの人達みたいに、自分達とちょっと違うとあややって疎むし、アルヴィンさんが言ったように戦争とかで使われるような武器や兵器を作るのも人間。

結局、どの世界も人間っていうのは変わらないんだよね。

「フウ…？」

「あ、ううん。なんでもないよ」

エリーが不思議そうな顔をしてたけど、微笑んでそう言いほぐります。

…まだ、自分が人間でないということを言うのが怖いから、ね…

それからまた少し進んだところで、ちょっとした崖が見えてきた。

ちょっとだけ高いけど、この高さなら普通に降りれそうだね。

ということで、皆で下に降りただけど…

何か変なものを踏んだかと思ったら、急に煙が噴き出してきた。

すると途端に目がしみて、咳と涙が止まらなくなる。

「ごほごほっ！ みんな、無事？」

「ど…ごほごほっ。…どこですか？」

「けほけほっ！ 何も見えないよあ…というかエリー苦しい…」

わたしはエリーに抱きしめられたままだったので、エリーの抱きしめる力が強くなって少し苦しくなった。

「勘弁してくれ。この煙はなんだ？」

「げほっげほっ！ くー、目がしみる。催涙性の孢子だな、これ」

他の皆にも効いたみたいで、皆咳き込んでいる。

「…これ、ケムリダケじゃないかな」

少ししてだいぶ直ってきた辺りで、ジュードさんがわたし達の踏んだ物を見てそう言う。

「ケムリダケ？ こほっけほっ」

「うん。目や鼻に入ると…こほこほっ！ しばらくは…涙が止まらないんだ」

それはまた、面倒なキノコだね…

戦闘中とかに踏んだら大変だ。

「こうなると、ぼくがサイキョーだねー」

タイプには効果がなかったみたいで、飛び回りながらそう言う。

「と、ともかく、けほっ…踏まないように気をつけないとね。戦ってる途中とかはもっ」と

「そうだな、こんな状況で襲われたらひとたまりもねえしな…」

ということ、わたし達はキノコに注意しながら樹界の奥へと進んでいった。

結構奥のほうまで来ると、狼型の魔物達に囲まれてしまう。

でも、この子達は確か入り口で…

「…いつら…」

「今度はやる気になったようだな」

「どこからでもかかってこーい！」

「…！ 皆、待って！」

その時、人の気配がしたので戦闘態勢に入った皆に声をかける。

「どうした？ フウ」

「…この子達のご主人が来たみたいだよ」

わたしがそう言うと、黄色いコートを着た髭の長い大きなおじさん——ジャオさんが現れた。

「あんたは…」

「おっきいおじさん…！」

「おうおう。よう知らせてくれたわ」

ジャオさんはわたし達の前に立ちふさがると、狼達にそう言う。

…この人も魔物と会話できるみたいだね。

「イバルの他に、魔物と対話できるものがあるとはな」

「あなたは、ジャオさんですね」

「ん？ お前達には名乗っておらんはずだがのう」

「ハ・ミルの人達にな。んで？ どんなご用で？」

「知れたこと。さあ、娘っ子。村に戻ろう」

そう言つてジャオさんはこっちに歩み寄ってくる。

正確には、わたしを抱っこしているエリーに、だけど。

「少し目を離しているあいだにまさか村を出ておるとはのう。心配したぞ」

「いやー！ フウ君かばってー！」

そう言われたら庇わずにはられないね。

それに、わたしもこの人には言いたい事があつたし。

わたしはエリーに放して貰つて、一歩前に出る。

「エリーを放っておいて、今更なんなんですか…？」

「む…？ お主は見かけない顔じゃが…まあいい。それについては…すまんとは思っている」

「お前は、エリーゼとどういう関係なんだ？」

ミラさんがそう聞くと、ジャオさんはエリーが以前いた、育った場所を知っているという。

「なら、エリーを故郷に連れ帰ってくれるんですか？」

「……………」

「…どうせまた、ハ・ミルに閉じ込めるつもりなんでしょ」

「お前達には関係ないわい！ さあ、その子を渡してもらおう！」

話すだけ無駄、だね。

そう思ったわたしは、短剣を取り出して構える。

「…仕方あるまい！」

「来るぞ！」

ジャオさんがハンマーを取り出し、ジュードさん達もそれぞれ武器を構える。

それと同時に、わたしはジャオさんに向かって突撃する。

「むうん！」

「っ、く…」

それを見たジャオさんはハンマーでわたしを殴りかかってくる。

辛うじて二つの短剣で防御するけど、体が小さくて軽いせいで吹き飛ばされてしまう。

「エリーゼ、わしと一緒に来い！」

「やだー！」

「嫌です！」

ジャオさんがエリーと一緒に来るように言うが、エリー達は嫌だという。

「聞き分けのない子だ…」

「貴方こそ聞き分けてよ！」

受身を取って群がる狼型魔物をサブマシンガン×2で撃ちながら再び突撃する。

ジャオさんももう一度ハンマーを振るってくるけど、今度はちゃんと避けて懐に入り込み、

「飛燕連脚！」

そこから小さく飛び上がりながら二連続回し蹴りを放つ。

体格差のせいで威力は少なめだけど、それでもやるしかない。

「落ちろ！」

飛燕連脚から続いて踵落しを繰り返し、一旦距離を取る。

「ぬう、やりおる…だがまだ甘い！」

そう言ってハンマーを地面に振り下ろし、地面から岩を隆起させて攻撃してくる。

だけど、そんな力任せな技をわざわざ喰らうほどわたしもバカじゃない。

ハンマーを振り上げた時点でこの攻撃を予想し、うまくサイドステップで避ける。

「小さいからって甘く見ないでよ！ エリー！」

「わかりました！」

そう言いながらさらに距離を取りエリーと共鳴し、二人で詠唱を始める。

「魂をも凍らす魔狼の咆哮」

「響き渡れ！」

「「ブラッディハウリング！！」」

詠唱を終えると、ジャオさんを中心に闇の咆哮とエネルギーが包み込むように立ち昇る。

これなら、どう…！？

「くっ…なかなかの威力…じゃが無駄よ！」

「そんな…」

「おいおい、どんだけタフなんだよ…」

あまりのタフさに、アルヴィンさんもそう言う。

「…何故だ、娘っ子。その者達といても、安息はないぞ?」

ジャオさんがエリーにそう聞く。

「…ともだちって言うてくれたもん!」

「もう寂しいのはイヤだよ!」

その問いかけに、エリーとティポはすぐにそう答えた。

「二人もこう言ってる。それに、決めたのはエリー自身だよ」

「…エリーゼ」

その答えを聞いたジャオさんは、困ったような表情をする。

「…アルヴィン…フウ…！」

そんな時、ジュードさんがわたし達に聞こえるくらいの声で、この状況を打開する策を言ってきた。

…なるほど、よく観察してるね、ジュードさんは。

「正直に言おう。わしも連れていくのは本意ではない。…許してくれ」

「それなら、連れていこうとしないでくださいよ」

そう言っつて、わたしはリボルバーをジャオさんに向けて構える。

横にいるアルヴィンさんも、自分の銃をジャオさんに向けてける。

「…もう、やめておけ」

「誰が、やめるもんですか！ アルヴィンさん！」

「おう！」

わたしはアルヴィンさんの名前を叫び、それを合図に二人でジャオさんではなく、横に生えた樹を撃ちまくった。

わたしとアルヴィンさんの銃弾を打ち込まれた樹は、それに絶えられず折れて倒れていく。

「なんだと!？」

それに驚くジャオさんだけど、わたし達の狙いはただ樹を倒すだけじゃない。

その樹の倒れる先にはさっきわたし達が踏んでしまったあのケムリダケが無数に生えていて、樹が倒れた瞬間辺りを胞子が蔓延していく。

「口を押さえて!」

ジュードさんの言葉と同時にわたし達は口を押さえ、胞子で視界が遮られている間にわたしはエリーの手を引いて出口へと走った。

樹界を駆け抜けて（後書き）

―今回登場した共鳴術技―

○ブラッディハウリング⇨ネガティブゲイト（フ）＋ネガティブゲイト（エ）

闇の咆哮とエネルギーが対象の敵を包み込むように立ち昇り、打ち上げるように攻撃する共鳴精霊術

大きな街、カラハ・シャル到着！

ジャオさんのいる樹界から全力で走って、わたし達はカラハ・シャルの街へとやってきた。

「やっとカラハ・シャルに着いたね」

「えらく遠回りしちゃったな」

まあ、検問があっただから仕方ないでしょ。

「もうでっかいおじさん来ないかなー？」

「追って来る気配は感じられないね。それに、あの人目立つからこんな街中までは追いかけてこないよ」

心配そうに後ろを見ながらティポがそう呟くけど、わたしがそう言うとなんとか少し安心したような表情になる。

ま、大きい街中だからジャオさんじゃなくて、兵士の方が脅威だと思っけど。

…あの手配書なは大丈夫かな。

「…おっ、この店、なかなかいい品がそろってるな」

「いらっしゃい！ どうぞ見ていってくださいよ」

アルヴィンさんがそんなことを言いながら、街に入って正面にあった骨董品店に向かっていく。

「骨董か…ふむふむ」

ミラさんも興味があるみたい、こういうの好きなのかな？

「なんだか、街のあちこちが物騒だな？」

そんな時、アルヴィンさんが骨董品を見ながら店主の人にそう尋ねる。

「ええ。なんでも首都の軍研究所にスパイが入ったらしくてね。王の親衛隊が直々に出張ってきて、怪しい奴らを検問してるんですよ。まったく迷惑な話で…」

ふうむ…やっぱりこれって、ジュードさんとミラさんのことだね…

そんな悪いことしてる人についていって、大丈夫なのかな…？ い

や、悪い人じゃないんだけどね。

「…キレイなカップ」

「でも、こーゆーのって高いんだよねー」

「ん、まあね。でもそれだけ価値のあるものなんじゃないかな？」

そんな話をしている横で、わたしとエリーは先にいたお客さんが手に取ったカップを見て、そんな感想を言っていた。

「お、お嬢ちゃん見る目があるね。そいつは『イフリート紋』が浮かぶ逸品ですからねえ」

「『イフリート紋』！ イフリートさんが焼いた品なのね」

そんなわたし達の言葉を聞いた店主の人が、このカップについての説明をしてくれ、カップを手にとっていた人がそう言う。

イフリートっていうと、四大精霊の内の火を司る精霊だっけ、本に書いてあったなあ。

そんな凄いのが焼いた物なんだ…

それを聞いて喜ぶ女の人から、突然ミラさんがカップを奪い取り手の上で投げたりする。

「ふむ。それは無かるう。彼は秩序を重んじる生真面目な奴だ。こんな奔放な紋様は好まない」

そして、カップを指で回しながらそんなことを言う。

その言葉に、さっきまでカップを持っていた女の人の横に立っていったおじいさんが反応する。

「ほっほっほ、面白いですね。四大精霊をまるで知人のように。確かに、本物のイフリート紋はもつと幾何学的な法則性をもつものです」

そついいながら、カップとセットのお皿を裏を見るおじさん。

「おや、このカップが作られたのは十八年前のようですね？」

「それが…何か？」

…ん？ 十八年前…？

「ちょっと待ってよ、イフリートって二十年前から召喚できなくなっただけ…」

「う…」

「ほっほ、小さいのによくご存知ですね。お嬢さん」

ぐ…ま、また小さいって…

……もう、どうせわたしは小さいですよ、ちびっこですよ…ぐすん…

「残念、イフリートさんが作ったんじゃないのね…でも、いただくわ。このカップが素敵なことに変わりないもの」

わたしが一人で落ち込んでいる横で、さっきの女の人カップを買うことにしてみた。

というかエリー、頭撫でてくれるのはちょっと嬉しいんだけど惨めに感じてくるから出来ればやめて…

なんてわたしの思いが伝わるはずも無く、しばらくわたしは撫でられ続けていたのです。

「ふふ、あなたたちのおかげで、いい買い物ができちゃった」

それから少しして、わたし達はさっきのお店から少し離れた広場へと移動して、女の人にお礼を言われていた。

「ドロツセル・K・シャルよ。よろしくね」

「執事のローエンと申します。どうぞお見知りおきを」

女の方はドロツセルさん、おじいさんは執事でローエンさんと言うらしい。

執事かあ…なんとなくお嬢様っぽいなって思ってたら本物だったみたい。

「お礼に、お茶にご招待させて頂けないかしら？」

お茶会かあ…なんか楽しそう。

「お、いいね。じゃあ後でお邪魔するのでしょうか」

「私の家は、街の南西地区です。お待ちしておりますわ」

そう言って、ドロツセルさんとローエンさんは先に帰っていった。

「そんな暇など無いのだがな」

「んー、でも、案外好都合かもしれないよ？ 兵士さんが沢山いるから宿に泊まれるかどうかも怪しいし」

「お前、マジで子供なのに頭の回転早いよな…」

「子供扱いするなあっ！」

「ふむ。では街の様子をうかがってからお茶にするとするか」

あれ？ ミラさん案外乗り気じゃない？ 何かジュードさんとアルヴィンさんも噴き出してゐるし。

それから、ジュードさんとミラさんが子供に手配書の人だとバレたり、街の風車を見てエリーとティポの三人ではしゃいだりしながら街を回り、街の南西地区へと向かった。

「お待ちしておりましたわ」

南西地区に着くと、ドロツセルさんとローエンさんがわたし達を待っていてくれた。

で、ドロツセルさんの後ろのお屋敷がドロツセルさんのお家らしいんだけど…

「…凄いお屋敷…」

あまりの大きさに、思わずそう呟いていた。

ルウィーの教会と同じくらい大きいなあ…

そんな時、ドロツセルさんのお屋敷から兵士さんとおじさんが二人出てきた。

ミラさんが言うにはラシユガル兵らしくて斬りかかろうとしてたけど、アルヴィンさんに止められていた。

その兵士さんとおじさん達は馬車に乗って、どこかへ行ってしまった。

「今のは…」

「…お客様はお帰りになりましたか」

む、なにか意味ありげな台詞。

んー、でもよくわからないし、別にいつか。

ドロツセルさんについてお屋敷の方に歩いていくと、ドロツセルさんに似た感じの男の人がお屋敷から出てきた。

「やあ、お帰り。お友達かい？」

「お兄様！」

お兄さんなんだ。通りで似てると思った。

「紹介します。…あ、まだみんなの名前を聞いてなかった」

あ、そういえばこっちは名乗ってなかったね。

「ははは、妹がお世話になったようですね。ドロツセルの兄、クレイン・K・シャルです」

「クレイン様は、カラハ・シャルを治める領主様です」

クレインさんの自己紹介に続いて、ローエンさんがそんなことを言う。

へえ、領主様なんだ……………え？

「この街の領主…！？」

ジュードさんが驚いた様子でそう言う。

他のみんなも驚いた顔をしている、まあ、そういう反応が普通だね。

その後、クレインさんにお屋敷の中に案内された。

お屋敷は、外もすごかったけど中も凄く広かった。

そこでクレインさん達とさっきの出来事を話していたんだけど、ローエンさんがクレインさんに耳打ちをしにきて、それからクレインさんがどこかへ行ってしまった。

「俺も、ちょっと」

クレインさんに続いて、アルヴィンさんもどこかに行こうとする。

「アルヴィン？」

「どこいくの？」

「生理現象。一緒に行くかい？」

「っ……！ バカっ！ アホっ！ 死ねっ！」

「ちょ、聞いてきたのそっちなのにひどくねえ！？」

知らない！ 女子の前でそんなデリカシー無い事言う方が悪いんだよ！ まったく…

「ねえねえ、みんな旅の途中なんでしょう？ 旅のお話を聞かせて」

クレインさんとアホヴィンがお屋敷を出て行った後、ドロツセルさんが旅の話が聞きたいと言ってエリーとわたしの近くに座ってきた。つて言っても、わたし達も最近同行したばかりなんだけどね。

「あの…わたし…」

「私、この街から離れたことがなくて…だから、遠い場所のお話を知りたいの」

「わたしも…外に出たことなかったです。でも…」

「ジュード君達が、エリーを連れ出してくれたんだー。海と森を通ってねー、波やキノコがすごかったー」

「ああ、あのキノコ食べられるんだってね。シチューとかにすると美味しいんだって」

「そうなんですか!？」

お、おお、なんか食いついてきた…

まさか食べ物に反応するとは思ってなかったから、ちょっとびっくりしたよ。

「ふふつ、エリーとフウは仲良しなのね。それにしても二人は海を渡ったんだ？ いいなあ。私、まだ海を見たことないの」

「海には気をつける。岩に化けるタコが出るぞ」

「岩に化けるタコさん!？」

「あの、貝や魚も…います」

「あ、貝殻で作ったキレイなアクセサリなら広場のお店で見たわ」

「へえ、そうなんだ。一度見てみたいかも」

「キレイなアクセサリ…」

「興味あるの？ だったら今度プレゼントするわね。お友達の証よ」

ドロツセルさんがそう言うと、エリーは少し照れながら、だけどすごく嬉しそうに頷いた。

ふふ、エリー、もうドロツセルさんとは仲良しだね。

「わーい。生きてる貝は気持ち悪いけど、死んだ貝殻はキレイだねー」

「ティポ、色々台無しになる気がするからそう言うことは思っても言っちゃダメだよ…」

たまーにティポって余計な一言を言うことあるよね…

「プレゼントをするのが友達の証なのか？」

「ええ。信頼を形にして贈るの」

「タダでもらえると得した気分だしねー」

「ティーパー？」

「ごめんなひゃいー、引つ張らないでー」

ちよつと空気の読めない人形をうにょんと軽く引つ張る。

それにしてもよく伸びるよねえ、ティポは…

「なるほど…」

「ほっほっほ、お嬢様によいお友達ができたようですね。どうぞおくつろぎください。お菓子もたくさんございますよ」

と、そんな感じでドロツセルさんと色々なお話をしたりして、楽しい時間を過ごしていった。

しばらくお話をしていると、急にお屋敷の扉が開け放たれる。

何だろう？　と思って扉の方を見てみると、そこには兵士さんを連れたクレインさんが立っていた。

…どうしたんだろう…？

「まだ、お帰りいただくわけにはいきません。…あなた方が、イル・ファンの研究所に潜入したと知った以上はね」

え、え？　ど、どういうこと？

「な、なんのことか…」

「とぼけても無駄です。アルヴィンさんが、すべて教えてくれました」

「アルヴィンが！？」

ジュードさんがとぼけようとしたけど、クレインさんはそんなことを言ってきた。

…あいつが…わたし達を売った…？

い、いや、ダメ。確かにたまに気になった事はあったけど、仲間を
そう簡単に疑っちゃダメ…

「…軍に突き出すのか？」

ミラさんがそう問いかけるけど、クレインさんは首を横に振った。

「いいえ。イル・ファンの研究所で見たことを教えて欲しいのです」

そう言つて、椅子に座るクレインさん。

んー、それはジュードさんとミラさんにしかわからないね、ここは
黙ってしよう。

「…ラ・シュガルは、ナハティガルが王位に就いてからすっかり変
わってしまった。何がなされているのか、一六家りくけの人間ですら知ら
されていない…」

「軍は、人間から強制的にマナを吸い出し、新兵器を開発していた」

「人体実験を？ まさか、そこまで！？」

え…でも、そんな事したらそれをされた人間は…

…マナは、この世界の人にとっては血と言っても過言でもないような大事なもの。それが無くなってしまえば……その人間は、死ぬ。

そんな実験をしているなんて…

「嘘だと思いたいが…事実とすれば、すべてつじつまが合う…」

「実験の主導者はラ・シュガル王…ナハティガルなのか？」

「そうなるでしょう」

「……………」

「…ドロツセルの友達を捕まえるつもりはありません。ですが、即刻この街を離れていただきたい」

まあ、そうなるよね。

わたしも一つの都市を治めてたことがあるから、その判断は間違っていないと思う。

「ありがとうございます、クレインさん」

そう言われたジュードさんとミラさんは、席を立てクレインさんにお礼を言い、お屋敷から出て行く。

「エリー、行こう？ ドロツセルさん、またいつか会おうね」

「はい…お友達だから…また、いつか…」

「またねー」

「ええ、またね。エリー、フウ、ティポ。気をつけてね…」

わたしとエリーもドロツセルさんにそう言って、二人の後を追いかけた。

ジュードさんとミラさんを追って広場まで来ると、アルヴィンさんがまた鳥で何かをしていた。

「よ」

「アルヴィン！」

「アルヴィン君、ヒドイよー！ バカー、アホー、もう略してバホー！」

「ホントだよ！ アルヴィンさんの大バカ！ ドアホー！ 略して大ドバホーっ！」

「もうそれ意味わかんねえよ……」

要するに、凄くバホーって意味だよっ！

「なぜ、私達をクレインに売った？」

「売ったなんて人聞きの悪い。シャルル郷が、今の政権に不満をもってるってのは有名だからな。情報を得るにはうってつけだ。交換で、こっちの情報を出しただけ。いい情報聞けたろ？」

「それは、そうだけど。でも、誰にも何も言わないでそう言うことするの、やめてね」

「へいへい」

この人…ホントにわかってるのかな？

「ラ・シュガル王ナハティガル…こいつが元凶のようだ。ナハティガルを討たねば第二、第三のクルクニスの槍が作られるかもしれん」

くるくにすの、槍…？

クルクニスって確か、創世記の賢者の名前だったよね。

「王様を討つの…？」

「ああ。君達国民は混乱するだろうが、見過ごすことはできない」

恐る恐る聞くジュード君に、何の迷いもなく答えるミラさん。

なんか、すごいなあ…

「お前らは…手配書の…！」

「往来で堂々としすぎたかもな」

広場で無防備にずっと立ち話をしていたせいで、兵士さんに見つかってしまった。

でも、よくあんな手配書でわかったね…

なんて言ってる場合じゃないか。ともかく、この人達を無力化しな

いと…

そう思い武器を構えようとすると、後ろから誰かがやってくる気配がした。

「南西の風？…いい風ですね」

そう呟きながらやってきたのは、ドロツセルさんの所の執事のローエンさんだった。

「執事さん？」

「この場合は、私が…」

そう言つて、ローエンさんは三本の短剣を取り出した。

…何するんだろう…？

「おい！　じいさん！　こっちを向け！　何を企んでる！」

「おおっと、怖い怖い…」

そう脅えるフリをしながらローエンさんは振り返り、持っていた三本の短剣を空高く投げ飛ばした。

…風…短剣…なるほど、この人、只者じゃないみたい。

「おや？ 後ろのお二人。陣形が開きすぎていませんか？ その位置は、一呼吸で互いをフォローできる間合いではないですよ？」

ローエンさんが後ろの二人の兵士さんにそう言うと、その二人は言われたとおりに陣形を狭めた。

「貴様…余計な口をきくな！」

「そしてあなた。もう少し前ではありませんか？ それでは、私とはともかく後ろのみなさんを拘束できません」

「ふん」

今度は前の兵士さんにそう言うと、兵士さんはわざと言われたとおりにせず、後ろに下がった。

「いい子ですね」

その時、さっきローエンさんが投げた短剣が三人の兵士さんを囲むように地面にささり、結界のようなもので三人の動きを止めた。

…すごい。風向きと風の強さを読んでうまく具合に短剣を狙った場所に投げた上に、兵士さん一人一人の性格まで読んで結界の範囲内に収まるように誘導した…

この人、一体何者なんだろう…？

「では、これで失礼します。さあ、みなさんこちらへ」

ローエンさんは兵士さん達に一礼すると、わたし達を南西地区へと連れてきた。

「ローエン君すごいー！　こわいおじさんたちもイチコロだね！」

「いえいえ、イチコロなどとてもとても。私程度ではただの足止めです」

いやいや、あの短時間であれだけできるんだから、凄いと思うけどなあ。

「助かりました。ありがとう。えっと…ローエンさん」

「ローエンで結構ですよ」

「それでローエン。我々に用があるのだろうか？」

「おや、直球ですね。実は、みなさんにお問い合わせがあるのです」

お願い？ 兵士さん達に追われてるようなわたし達に？

「お尋ね者いる一行にか？ 楽しそうな話じゃなさそうだな」

確かに、仕方が無かったとはいえ一度出て行くように言っただけなのに、よっぽど急なお願いなんだろう。

それで、ローエンさんが言うにはさっきお屋敷にラ・シュガルの王様が来て、王命で街の人を強制徴用したみたい。

あ、もしかしてお屋敷に入る前に出てきた、あのおじさんかな。

それで、街の人の危険を感じたクレインさんが、徴集された人を連れ戻しに向かったらしい。

でも、ナハティガル王様は反抗者を許すような人ではないみたいで、このままだとクレインさんが危ないみたいだ。

それで、わたし達に力を貸して欲しい、とのことだ。

「ドロツセル君のお兄さんを助けよう！ ね？ エリー」

「（じくじく）」

「うん。クレインさんもだけど、連れて行かれた人達も心配だし」

「そうだね。まだそれほど時間が経ってないから無事だといいいけど……」

ミラさんも兵器を使おうという企みを見過ごせない、といって、みんなでクレインさん達を助けに行くことになった。

ということで、わたし達はクレインさん達を助けるべく、バーミア峡谷へと向かっていった。

——見て、学ぶ——

ア「今のフウ姫の技、優等生君の技に似てなかったか？」

ミ「確かに、ジュードのように一瞬で移動する技だったな」

ジ「そういえば、前にエリーの技に似た技も使ってたよね」

フ「あ、気付いた？ えへへ、みんなの言うとおり、あの技はジュ

ードさんとエリーの技を見て、わたし流にアレンジしたんだ」

エ「そんなことできるんですか？」

フ「前から他の人とかの技を見て覚えるのは得意なんだ」

ジ「へえー、すごいね。ミラとかアルヴィンの技も真似れるの？」

フ「ミラさんとアルヴィンさんのはまだできてないんだ。でも、頑張ればできるかも」

ミ「ふむ、味方だからこそ心強いが、敵だしたら厄介な能力だな」

ア「本当に、たまに子供なのか？　って疑いたくなるな…」

——ポーチの秘密——

フ「ふふー、今回も絶好調ー」

エ「フウ、強いです…！」

テ「さいきょーだねー！　ぼくのほづが強いけどー」

フ「それ最強じゃないじゃん…」

ジ「思ったんだけどさ、フウの持つてる鞆ってどうなってるんだろ
うね……」

ア「確かに、あんな小さいのにけっこうでかい武器とか入るよな……」

ミ「ふむ、聞いてみるとしよう。フウ、前から気になっていたのだが、その鞆は一体どうなっているんだ？」

フ「え？ これ？ んっふふー、それはー……」

ミ・ジ・ア「……それは？」「」「」

フ「秘密ー！」

ミ「なんだと！？ 気になるじゃないか！」

ア「……フウって」

ジ「謎だらけだね……」

大きな街、カラハ・シャル到着！（後書き）

さて、次回はフウちゃんがアルヴィンの出番を少し取っちゃうかも
しれない…

まあ、フウちゃんも銃使いだし、ライフルってこついつときくらい
しか出番なさそうですし…

峡谷の施設と変異体

カラハ・シャルルを出たわたし達はクラマ間道を抜けて、クレインさん達がいるというバーミア峡谷へとやってきた。

「すごい地層だね……」

「ここは、ラ・シュガルでも有数の境界帯ですからね」

ジュードさんの言った通りこの峡谷は何層もの地層で構成されていて、登るのに一苦労しそうな場所になっていた。

こういう地形とか、わたしが一度道を間違えて行っちゃったキジル海瀑とかの不思議な形の岩とかも、全部靈勢がぶつかってできた自然の地形なんだとか、不思議だなー。

「もしかして、ここ登るのー？ 疲れちゃうよー」

「はは……でもクレインさんの事もあるし、頑張るしか——ッ！ エリー、危ないっ！」

「え？ きゃっ！」

崖を見上げながらそう言うティポに、苦笑いで答えようとしたとき、崖の上から殺気を感じて咄嗟にエリーを庇うように抱きかかえ、岩

の陰に隠れるように跳んだ。

他のみんなも襲撃されたことに気付き、素早く近くの岩陰に隠れていた。

「待ち伏せ…エリー、大丈夫？」

「は、はい、大丈夫です…」

どうもここには見られたくないものがあるみたいだね。そこまでされると何があるのか余計気になるんだけどさ。

どうにかここからアイツを撃てないかと銃を取り出して狙おうとしたけど、場所が悪くてうまく狙えない。

アルヴィンさんの方でも試そうとしたみたいだけど、やっぱり場所のせいでうまく狙えないみたいだ。

んー、こんなときはどうすればいいかな…

「わー、なんとかしてよー！」

「なんとか隙を作れば…」

隙…あ、そういえばアレがあったっけ、すっかり忘れてた。

「アルヴィンさん、いまからわたしがアイツの隙を作るから、その間に一発で仕留められる？」

「一発…また難しい事を言うねえ…でも、やってやるつじやないか」

そう言つてアルヴィンさんは銃に弾を込め始める。

その間にわたしはポーチから閃光手榴弾を取り出し、アルヴィンさんの準備を待つ。

「…オーケー、こっちは準備万端だぜ」

「それじゃ、行くよ！ みんな、わたしがこれを投げたら目と耳を塞いでね！」

みんなにそう忠告をしておき、閃光手榴弾のピンを抜いて少し間を置き、さっきのヤツの方へと投げる。

そして手榴弾が炸裂し、峡谷一帯が閃光の光に包み込まれる。

「アルヴィンさん！」

「了解、ちびっ子！」

わたしが叫ぶと、アルヴィンさんが岩陰から飛び出して兵士を撃つ。
というかちびつ子言うなって言ってるのに…

撃ち出された弾丸は目を押さえてもがく兵士さんの頭を捉え、見事に一発で兵士さんを仕留めた。

「さすが傭兵、だね」

「頼まれた依頼はなんでもこなす、つてのが仕事だからな」

「ふうん…」

なんでも、ねえ…

「でもフウ、変わった物を使ってたよね」

「確かに、光の精霊術を使った道具でしょうか？」

「だが微精霊の力は感じなかったぞ。一体どういうことだ？」

そういえば、リーゼ・マクシアにはこういう技術ないんだっけ。本に挟まってた神様の書いたメモにそんな事が書いてあったなあ。

…ならなんで持たせたし、あのバ神…

「あー、光を発するっただけで、詳しい仕組みは知らないんだよね。これもこの銃と一緒に貰った物だし」

銃を取り出しながらそう言う。

ともかく、原理とかそういう細かいのは知らない（面倒くさい）から、適当にごまかしておくことにした。

「そっぴや、ちびっ子の武器って貰い物ばかりだよな。一体誰に貰ったんだ？」

…ごまかして終わりにしたかったのに…アルヴィンさんのアホ…

「あ、それ僕もちよつと気になる」

「いや、そのお…できれば思い出したくないんだ…」

とりあえずアイツの事を頭に浮かべて咄嗟に思いついた事を言うってみる。

アイツは、思い出すだけで腹が立ってくるからね…

「あ、その…ごめん…」

…あれ？　なんでジュードさんとアルヴィンさん凄く気まずそうな顔してるんだろう？

…？　変なの。

「！　これは…イル・ファンで感じた気配…？」

そんな時、急にミラさんが洞窟の方に振り向きながらそう言った。

確かに洞窟の中からは、目視できるくらいに何かの力があふれ出していた。

これは…マナ？

「まさか…ここにもあの装置が？」

「急ぐぞ」

それを見てジュードさんとミラさんは一瞬で険しい表情になり、洞窟の中へと入っていく。

もちろんわたし達もそれに続いて洞窟に入る。

洞窟の中には、見るからに触ったら危なそうな魔方陣と、上にある妙な物体に向けてマナを放出する機械があった。

そして奥の方をよく見てみると、クレインさんと街の人と思われる人達がケースのようなものに入れられ、苦しそうにしていた。

「ぐうっ…」

「クレイン様！ …やはり人体実験を行っていましたか」

「これは…人間からマナを吸い出してる！？」

そんな事をしたら、一霊力野のあるリーゼ・マクシアの人はもちろん、霊力野の存在しないわたしの世界の人でも死に至るっていうのに、なんて事を…

それからミラさんが魔方阵を抜けようとしてアルヴィンさんに注意される。

「…そうか！ これ、研究所でハウス教授を殺した装置と似てるんだ！」

「ここでも一黒匣^{シン}の兵器を作ろうというのか？ それほどたやすく作れはしないはず…」

ミラさんは魔方阵に近付きながら、何かを取り出して考え込む。

あのディスクみたいなもの…なんだろう…？

「ミラ？」

「私達を追うのをやめた理由がこれか。くだらぬ知恵ばかり働く連中だな」

なんだか怒った様子のミラさん、よっぽどその黒匣っていうのになにかあるのかな。

「展開した魔方陣は閉鎖型ではありませんでした。余剰の精霊力を情報にドレインしていると考えるのが妥当です。谷の頂上から進入して、術を発動してるコアを破壊できれば…」

「みんなを助けられる？」

「…行こう、ジュード」

さっきまで髭を触りながら何かを考え込んでいたローエンさんがそう言い、わたし達は谷の頂上を目指すことになった。

「空襲剣！」

「アサルトダンス！」

道中の敵を蹴散らしながら、どんどん上を目指して登っていく。

大分登ってきたし、そろそろ頂上だと思うんだけど…あ、見えてきた。

「あそこからマナが放出されてるって事は…もうすぐ頂上だね」

「ああ、間違いないだろう」

……あれ？ わたしの言葉に反応してくれたのミラさんだけ？
他の皆は？

と思い後ろを向いてみると、息を切らしたみんながそこにいた。

「…み、みんな、大丈夫…？」

「…お前は、こんな俺達を見て、大丈夫だと思うのか…？」

「っ、疲れました…」

「老体には、少々きつかった、ですね…」

「み、ミラも、フウも、登るの早すぎなんだよ…」

「「え？ そう？（む？ そうか？）」「」

ミラさんと同じような反応を見ると、みんながため息をついてジト目で見てくる。

…だってミラさんが急ぐから、自然と置いてかれないように早く進んじゃうんだもん…

それから少し休憩してみんなの体力が回復した後、改めて頂上へと登った。

「くっ…コアが作動してる！ けど、この高さ…」

「どうするよ？」

「時間がありません。噴き上がる精霊力に対して魔方陣を展開します。それに乗ってバランスをとれば、無事に降下できるかもしれません」

「つまり飛び降りるって事…？」

ということは、コアを狙うチャンスは一度きり…

「…行こうよ、みんなを助けなきゃ」

「そうだね」

「ああ、他に手はない」

「ふふふ。なかなか度胸がありだ」

「見かけによらずな。特にちびっ子」

「だからちびっ子って言うなあっ！」

ホントに、コアを撃つ前にアルヴィンさんを撃ってやるつか…

「お嬢さんはここで待っていますか？」

ローエンさんにそう訊かれるエリーだけど、首を横に振った。

つまりは一緒に行くということだね。

「手を離さないでくださいね？」

その言葉に頷いて、エリーはティポを抱きしめながらローエンさん

の手を握った。

「よし、準備はいいよ!」

「ホント、色々持つてるよな…」

ライフルを取り出して弾薬の確認を終えてそう言う。

でも、一番の心配は揺れて標準がズレて外すこと、それだけはやらないようにしないと。

「では、参りますよ!」

そう言うてローエンさんが上空にナイフを三つ投げる。

すると、紙飛行機みたいな魔方陣が形成された。

それに七人全員で乗り、大穴の中へと降りていく。

「…見えたよ! フウ!」

「うん…っ…!」

ジュードさんに言われライフルを両手で構えなおしてコアを狙おう

とする。

けれど予想以上に揺れが激しく、うまく狙うことができない。

「く…揺れでうまく…」

そう呟くとジュードさんがわたしの隣に来て、わたしの腕を支えてきた。

「これでどう!?!」

少しドキつとしたけど、今はそれ所じゃない。

「っ、ありがとう!」

一言そう言って、再び集中する。

「……………今ッ!」

コアに狙いが定まった瞬間、わたしは引き金を引いて弾丸を放つ。弾丸はしっかりとコアを捉えて飛んでいき、貫いた。

貫かれたコアは砕け散り、それと同時にコアの下にあった岩が爆発して、洞窟の中の機械も全て停止した。

ある程度の高さまで降りると、紙飛行機型の魔方陣が消えた。

「わわわっ！」

うまく撃てたことに安心してたせいで、突然足場が無くなってバランスを崩してしまい、頭から地面に向けて落下していく。

地面も近かったので、わたしは来るべく痛みに目をぎゅっと瞑った。

……………あれ。

いつまでたっても痛みがやってこないため、恐る恐る目を開いてみる。

「ふう、大丈夫？」

「ふえ…？ あ…」

目を開くと目の前にはジュードさんの顔があった。

…って、え？ こ、これって…

「…どうかした？」

多分、ジュードさんは落ちているわたしを咄嗟に助けてくれたんだろう。

その結果、今わたしは…ジュードさんに所謂お姫様抱っこをされている状態になっている。

「ふえあつ！？ な、なな何でもない、なんでもないよっ！」

状況を理解した途端、急に恥ずかしさがこみ上げてきてわたしはそう言っただけジュードさんの腕から飛び降りた。

「ねえ、本当に大丈夫？ 顔真っ赤だったよ？」

「ひゃああつ！」

ジュードさんがわたしの顔を覗き込むように横にやってきたけど、わたしは変な悲鳴を上げながら咄嗟にエリーの後ろに隠れた。

「きゃっ！ ふ、フウ…？」

「わ、わた、わたしはホントに大丈夫でしゅっ！ はいっ！」

ああもう、自分が何言ってるのかわかんない。

男性恐怖症…いや、恐怖症じゃないんだけど、でもやっぱりまだ慣れない…

それから逃げ出す街の人達の中からクレインさんを見つけたし、それをローエンさんが介抱する。

まだ捕まってからそう経ってなかったみたいでマナもそこまで吸われてなく、気を失ったけど命に別状は無かったみたい。よかった。

少しして気を失ってたクレインさんが目を覚ました。

「気がついた？」

「すまない。忠告を聞かず突っ走った結果が、これだ…」

「ご無事で何よりです」

「ナハティガルは、ここに来ているのか？」

ミラさんがクレインさんにナハティガルについて聞く。

まだちょっと辛そうにしているクレインさんだったけど、話してくれた。

「僕も、あの男を問い詰める気で来たのですが、親衛隊に捕らえられてしまつて…」

「そ、それで、街の人達と一緒にあそこに閉じ込められてたんですね」

これはわたしの台詞、キャラが違つて？ まだちよつと落ち着いてないんだから仕方ないでしょ…

「そうか」

「もーこんなところ、早く外に出よーよー！」

「だな。長居は無用だ」

そんな時だつた。

さつき壊したコアの下にあつた卵型の岩から、強い力を感じ取つた。

「み、みんな！ なにか、来るよ！」

皆にそう叫びながらエリーから離れ、二本の短剣を抜く。

…離れた時にエリーが少し残念そうな顔をしてたのは、気のせいだ
と思う。

「危ない、下がれ！」

そしてその岩から光と共に、不思議な色の魔物が現れた。

「な、何こいつ…!？」

「来るぞ、構えろ！」

魔物は岩から完全に出てくると、わたし達に襲い掛かってきた。

「こやつ、強力な精霊術を纏っています！」

「こいつを生むのがヤツらの目的か!？」

「でもなんだろう、この感じどこかで…」

「分析は倒してからにしてくれ！」

中々手ごわそうな相手だね…でも、

ジュードさんの言うとおり、どこかで感じたことのあるこの感じ…

なんだっけ、身近なんだけど、うー、思い出せない…

「ちょ、ちびっ子！ ボケツとすんなって！」

「へ？　うわっ！」

アルヴィンさんの声で足元を見ると、いつの間にか緑色の魔方陣から風が渦巻いてわたしを吹き飛ばそうとしていた。

魔法防御でそれを防いだ。
マジックガード

「いたた…アルヴィンさんありがと！」

「まったく、手間かけさせるなつての！」

とりあえず、やられたらやり返さないかね！

「それでも喰らえっ！」

ロケットランチャーを取り出して、魔物より高い位置に跳んで発射する。

「うりゃうりゃうりゃ！」

そこからすぐさまマナで魔法弾を装填し、次々と発射していく。

魔物は爆風に巻きこまれたまらず吹き飛んで地に伏せる。

「…随分と派手にやるこった」

「関心してる場合じゃないよアルヴィン！　いくよ！」

「はいはい…！」

「「魔神連牙斬…！」」

そこにジュードさんとアルヴィンさんが連続で衝撃波を放ち、追い討ちをかける。

だけどその程度でやられるようなやつでも無く、すぐに起き上がった精霊術を放ってくる。

「ローエン、頼む！」

「承知！」

攻撃をかいくぐって、ミラさんとローエンさんが共鳴術技を発動する。

「天地界！」

「六道を噛み砕け！」

「ロックヘキサ！！」

二人が詠唱を終えると、魔物の足元から六本の岩柱が魔物を突き上げる。

「よしっ！ エリー、トドメ行くよ！」

「はいっ！」

二人の共鳴術技に続いて、私とエリーも共鳴して共鳴術技を発動する。

「ティポレーザー！！」

ティポがわたしの持つライフルと合体し、ティポの顔の形の銃口から紫色のレーザーが放たれ、魔物を貫く。

それが決定打となったのか、魔物は力無く地に伏せた。

「はあああっ！」

そしてミラさんが魔物にトドメをさそうとした、けど。

「ダメだよ！」

それをジュードさんが止めた。

「何のつもりだ！」

「よく、感じてみてよ」

「…なに！？」

ジュードさんがそう言った時、突然魔物が光りを放ちはじめた。

…そっか…！ この感じ、なんか知ってると思ったら…

「これ…微精霊だよ」

魔物は徐々に輝きを増していき、小さな光の粒と一緒に舞っていく。

「おお、これは…」

「すごいすごい！」

そして輝きが強くなると、魔物は光になって消えていった。

「…ありがとう。我を忘れ、危うく微精霊を滅するところだった」

「え…？ あ…うん…」

ともかく、街の人もクレインさんも無事でよかった。

「さあ、カラハ・シャルルに戻りましょう。みな、大量にマナを吸い取られて相当弱っています」

「うん、捕まってた人達を無事に街まで送り届けないと」

魔物の脅威も去って、わたし達はクレインさんと捕まっていた人達を連れてカラハ・シャルルへと向かった。

——崖登り——

ミ「はっ！」

フ「よいしょっと！」

ジ「ちょ、ちょっと、ミラ！ フウ！ 置いてかないでよ！」

エ「二人とも…はぁ…登るの早すぎ…です…」

ア「ミラはともかく、なんだってちびっ子まであんな身軽なんだよ…」

ロ「なにか特別な…ふう…環境で育ったのでしょうか…？」

フ「みんなー！ はーやーくー！」

ミ「急がねばクレイン達の命が危ういぞ！」

ジ「ミラ達はもう少し他のみんなの事を考えてよっ！」

ア「ほんとに、ミラについていくのは大変だな…」

——将来について——

ジ「ごめんねエリーゼ、フウ。また危ないことにつきあわせちゃった」

エ「大丈夫…です」

フ「あのくらい、どうってことないよー」

テ「水くさいなー、友達じゃーん」

ア「ほんとか？ ミラにつきあうのは、俺でもしんどいぞ」

ジ「…だよね。…ねえ、二人とも。この辺りで、二人が落ち着いて暮らせるところを探そうと思うんだ」

エ「その話は…」

フ「また唐突だね…」

ア「まったくだな。引き取ってもらうあてはできたのか？」

ジ「それは…ただだけど」

フ「ええー、それはさすがに…」

テ「ムセキニーン！」

フ「ちょ、エリー！ 無言で引つ張っていかないでっ！」

エリーゼ、フウ、ティポが走り去る。

ア「あゝあ、どーすんの？」

ジ「…なんとかするよ。ミラとの約束だし」

ア「ミラとの、ね…だがエリーゼ姫はともかく、ちびっ子は別に大丈夫じゃないか？」

ジ「ダメだよ。確かにフウは強いけど、子供には変わりないんだから」

ア「…ほんと、優等生だなー…」

峡谷の施設と変異体（後書き）

——今回の共鳴術技——

○ティポレーザー＝フレアショット（フ）＋ティポサライブ（エ）
ティポがフウのライフルと合体し、闇属性のレーザーを放つ共鳴武
身技。

…なんだろう、エリーゼとのリンクアーツは結構思いつくのに、他
の皆とのリンクアーツがいまいち思い浮かばない…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3658x/>

テイルズオブエクシリア little angel

2011年11月14日23時24分発行